ISSN 2187-6894

BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

No.10

Museum-led Reminiscence Programs for Elderly People with Dementia:
A Collaborative Effort of Fukuoka Art Museum, Fukuoka City Museum and Fukuoka Asian Art Museum — ONIMOTO Kayoko, KAMACHI Masae, KAWAUCHI Ayaka 1

Notes in Commemoration of Sengai Gibon in Modern Times:
Introduction of Sengai Gibon's "Hanshan and Shede" Inscribed by Taishitsu Soshin from the Fukuoka Art Museum's Collection — MIYATA Daiki 14

Practical Approach to the Animation Exhibition "The World of Tomino Yoshiyuki" — YAMAGUCHI Yozo 23

Transcription of Unchuan Chakaiki – The Tea Party Records by OGI Seisai ⑥ — GOTO Hisashi 52

Edited by Fukuoka Art Museum
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan

福岡市美術館 研究紀要

第十号

二〇二二年

福岡市美術館 研究紀要

第10号

美術館・博物館が行う認知症患者のための回想法プログラム
～福岡市美術館・福岡市博物館・福岡アジア美術館との連携活動として — 鬼本佳代子、蒲池昌江、河口綾香 1

近代における仙厓顕彰をめぐる覚書
－福岡市美術館蔵 仙厓義梵筆、太室宗宸賛《寒山拾得図》の紹介を兼ねて — 宮田太樹 14

「富野由悠季の世界」展
企画の実際―アニメーション企画展の一事例として — 山口洋三 23

『雲中庵茶会記』翻刻稿 ⑥ — 後藤　恒 52

2022年

口絵 1
仙厓義梵筆、太室宗宸賛
《寒山拾得図》
福岡市美術館蔵

口絵２
青秀祐《与圧服―富野喜平氏撮影の研究記録による―I 造形の考察と立体再現》
2019 年　＊青森県立美術館での展示。photo: Daisaku OOZU　© オフィス アイ

口絵３
八嶋有司《この世界を風景の―Dive》2019 年
＊福岡市美術館での展示。撮影：山崎信一（スタジオパッション）© 創通・サンライズ

美術館・博物館が行う認知症患者のための回想法プログラム
～福岡市美術館・福岡市博物館・福岡アジア美術館との連携活動として

鬼本佳代子
福岡アジア美術館　蒲池昌江
福岡市博物館　河口綾香[1]

Ⅰ　はじめに

総務省の統計によると、2021 年の日本の高齢者（65 歳以上）の人口は、3640 万人、全人口に占める割合は、29.1％となった[2]。高齢者が増えることの課題の一つに、認知症があるだろう。厚生労働省は、認知症を「脳の病気や障害など様々な原因により、認知機能が低下し、日常生活全般に支障が出てくる症状」[3]としており、2025 年には 65 歳以上の 5 人に 1 人が認知症になるという推計もある[4]。このような課題に反応し、1990 年代後半から、認知症患者のためのプログラムを実施する美術館・博物館が見られ始め[5]、福岡県でも、筑紫野市歴史博物館において回想法の実践が行われてきた[6]。回想法とは、自身の過去について話すことで、精神を安定させ、認知機能の改善も期待できる心理療法のことである。

福岡市美術館および福岡市博物館、福岡アジア美術館の 3 館は、2020 年、文化庁が乃村工藝社に委託した公募事業「令和 2 年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益力強化事業』、博物館等における【新しい関係性の構築】による収益確保・強化事業』事業 A ①歴史博物館、自然史博物館、美術館における認知症対応プログラム実践事業 歴史博物館､自然史博物館を対象とした収蔵品等活用による『回想法』プログラム」に応募し、受託することとなり、実行委員会形式で認知症患者のための回想法を実施することとなった。本稿はその実施の記録と評価、今後の展望について述べるものである。

本プログラムの企画立案は、鬼本佳代子（福岡市美術館）、河口綾香・石井和帆（福岡市博物館）、山木裕子・蒲池昌江（福岡アジア美術館）が担当した。プログラム内容を決めるにあたってまずおこなったのは、先行事例等の調査と、「福岡市」の特徴についての考察である。考察の末、福岡市は「他都市と比べ、高齢化の進展は比較的穏やかである。一方で、流入人口が多く、過去の生活体験に格差が大きい。また、開発地区が多く、生活に根差した伝統文化が少ない。さらに、それぞれの活動範囲が広く、年齢階層ごとに活動場所が違うという特徴がある。そのため、価値観が多様で、地縁的な結びつきが弱く、地域コミュニティが希薄である」という特徴があると定義した。そこでこのプログラムに通底するテーマを、地域に特化したものではなく、多くの人にとって普遍的な「家族」とした。

回想法についての担当者の経験不足および認知症についての専門知識不足ということについては、筑紫野市歴史博物館で回想法を実践してきた奥村俊久氏、認知症を専門とする久留米大学医学部看護学科の古村美津代氏をプログラムの助言者・評価委員として迎えることで補うこととした。また、プログラム開始前に、担当者全員が専門家による「認知症マナー研修」を受講することとなった。

プログラムの参加者については､福岡市保険福祉局高齢社会部認知症支援課に協力を仰ぎ､通所施設である「小規模多機能ホーム森の家　みのり荘」（以下みのり荘）をご紹介いただき、同施設の利用者である 3 人の当事者の方に参加していただくことになった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大のこともあり、プログラムはオンラインでおこなうこととなったが、そのために、結果として同施設の職員であり介助者である田中史王氏に多大

なる協力をいただくこととなった。

プログラムの効果の計測については、評価表を作成し、美術館・博物館の担当者側と田中氏が表に従って記録をつけることとした。評価表については、筑紫野市歴史博物館で作成した評価表を参考に作成した[7]。

プログラム実施スケジュールは下記の通りである。

日程	プログラムタイトル	参加者	担当
2月2日 10時30～12時00	プログラム1回目 オリエンテーション 参加者からの聞き取り	みのり荘利用者3人 Y氏【男性・96歳】 K氏【女性・84歳】 T氏【女性・91歳】 参加者はすべて同じ	ファシリテーター：鬼本佳代子、石井 和帆、河口 綾香、蒲池 昌江／機材操作：上野真歩（福岡市美術館教育普及専門員）
2月9日 10時30～12時00（うち回想法は10時30～11時30）	プログラム2回目 福岡市博物館のプログラム 「思い出の歌は何？」		ファシリテーター：帆足 有紀（福岡市博物館教育普及専門員）／記録・資料準備：石井 和帆、河口 綾香／タイムキーパー：三角徳子（福岡市博物館教育普及専門員）／記録：小田川志穂（福岡市博物館教育普及専門員）
2月16日 10時30～12時00（うち回想法は10時30～11時30）	プログラム3回目 福岡アジア美術館のプログラム「家族の思い出」		ファシリテーター：蒲池 昌江／記録・運営サポート：山木 裕子
2月23日 10時30～12時00（うち回想法は10時30～11時30） 13時30～14:00	プログラム4回目 福岡市美術館のプログラム 「思い出のサクラ」		ファシリテーター：鬼本佳代子／記録・運営サポート：上野 真歩・中原千代子（福岡市美術館教育普及専門員）
2月25日 10時30～12時00	プログラム5回目 振り返り		ファシリテーター：鬼本佳代子、石井 和帆、河口 綾香、蒲池 昌江、山木 裕子

・プログラム評価：奥村 俊久、古村 美津代　　参加者介助：田中史王

以下、時系列に沿って各館担当者より詳細を報告したい。

Ⅱ　プログラム１回目　オリエンテーション　参加者への聞き取り

オリエンテーションでは、プログラム前に参加者との顔合わせとそれぞれの基本的な情報を得るための聞き取りを行った。聞き取りは、各参加者の認知度やお互いの関係性などを把握し、今後のプログラムにおいて話題のきっかけなどを把握しておくためである。表にある通り、参加者はＹさん（男性･96 歳）、Ｋさん（女性･84 歳）、Ｔさん（女性・91 歳）であり、３人ともみのり荘に通っている。質問は、石井・河口が、参加者の年齢・出身地・福岡へはいつ移動してきたかなどについて、蒲池が、仕事や家族構成・子どもの頃の思い出等を、鬼本が、家族についての情報･家族との思い出などを聞き取った。オンラインで画面越しの会話ということで不安があったが、介助者である田中氏の尽力もあり、参加者は皆、画面上でのやりとりを受け入れ、質問にもかなりしっかりと答えていた。基本的に、１人が話している間は、他の２人は黙っていたが、例えば、Ｔさんが話している間に、ＹさんやＫさんが合いの手を入れるなどの場面が見られ、話が進むうちにそれぞれの思い出が少しずつよみがえってきたのではないかと思われる瞬間があった。

さらに、この聞き取りの補足として、田中氏より家族からの聞き取りなど、詳細資料を提供いただいた。この聞き取り内容、評価者の助言、および田中氏からの資料をもとに、各館担当者がプログラムを組み立てることとした。

Ⅲ　プログラム２回目「思い出の歌は何？」 福岡市博物館のプログラム

１．プログラムの目的と準備

福岡市博物館（以下、博物館）の回想法プログラムは、人の聴覚的記憶に着目したもので、音を聴き、歌を歌うことを通して家族の思い出を回想し、語り合うことで認知症患者および介護者の精神的緊張の緩和をねらったものである。

まず、プログラムの内容に触れる前に、博物館における高齢者プログラムの現状及び本プログラムで使用した資料とスタッフ体制について説明する。博物館は、1990 年に福岡の歴史とくらしについて研究・展示をする施設として開館した。これまで高齢者を対象にした活動は、年に数回団体からの依頼を受けておこなう出前講座や講師の派遣がほとんどであり、博物館にとって本事業は初めての高齢者プログラムへの取り組みであった。考古・歴史・民俗・美術の分野からなる 18 万件以上の所蔵品から回想法に使用した資料は、「Ⅰはじめに」で触れた高齢者のバックグラウンドの多様性を踏まえて大衆的なもの、福岡という地域を象徴するようなものに限定した。今回は、戦前生まれ、市外出身、転入時期が戦後から平成時代という情報をもとに、1970 年代の結婚をテーマにした歌謡曲のレコードを主軸に、1960 年代の天神および中洲の街並みの写真を回想時の補足資料として選んだ。写真は A4 サイズで人数分出力し、レコードプレイヤーとレコードとを合わせて事前に施設に持ち込んだ。担当については、スケジュール表の通りである。参加者へのサポートや機器類の操作は、田中氏がおこなった。

２．プログラム内容

２－１導入

プログラム冒頭で、石井・河口にかわり、今回は教育普及専門員の帆足（参加者には「ゆき」と紹介）が進行役（ファシリテーター）として参加することを参加者に伝えた。事前準備でのやりとりについても「覚えている」との明確な返答があった。

まず、ファシリテーターは、現代の子どもたちがレコードを知らない現状を参加者に示し、使い方や曲について教えを受ける姿勢でのぞんだ。室内に置かれた「布で覆われた何か」に参加者の関心が向くよう誘導したところで、介助者である田中氏に布を取るよう指示し、目前に現れた何かを問うことから対話をはじめた。「蓄音機」とすぐに応えたＫさんは、隣家でレコードを聴いていたこと、身を乗り出して身振り手振りで針の取り付け方やレコードを据える位置を細かく説明しており、記憶にあるレコードプレイヤーとの形状や素材の違いにも触れている。Ｙさんは友人の家で聴いていたが使ったことはなく、Ｔさんは家族が仕事場で使っており、自分もよく聴いていたと語った。リモートという環境もあり、当初は参加者同士が同じ空間にいながらファシリテーターと個別に質疑応答をしているようであったが、参加者が声を揃えて「音楽はよく聴いていた」と頷きながら発話したことで、空間の空気が和らいだ。これを機にレコードを流した。

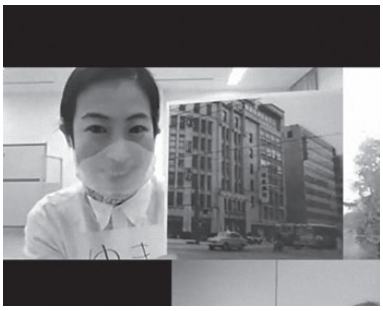
２－２展開―思い出の歌は何？

レコードが流れると参加者は、表情を緩めて机を叩いてリズムをとったり、歌う姿がみられた。曲名を問う質問で、Ｋさんが「瀬戸の花嫁？」と答えると、Ｙさんはモニターからｔさんへ視線を移して同意する行動がみられた。続くどこで歌を聞いていたか？の問いには、参加者が積極的に自宅や職場、店先などで音楽を耳にし、歌ってい

たことを語るようになり、話題は各人の思い出の歌に移った。郷土の民謡をよく歌ったというＴさんに対してＹさんが身体の向きを変えるなど他者への関心を示す様子がうかがえた。ファシリテーターの提案でＴさんが歌い出すとＹさん、Ｋさんはリズムをとりながらその時間を共有していた。歌い終わると笑顔で拍手するなど盛り上がりをみせた。つづくＹさんは、田中氏の勧めもあり「なら歌おうか」と故郷の宴席で歌われた民謡を一節歌い上げた。そのまま故郷でのくらしや思い出を語るＹさんに対し、Ｋさん、Ｔさんは顔を上げて傾聴していた。Ｙさんの流れを受け、続いてＫさんは、福岡に来た頃を振り返り、近郊にあった駐屯地のバーの様子、中洲のキャバレーで見聞きしたことについて時間軸を織り交ぜながら語った。Ｙさんは昭和 40 年頃、Ｔさんは 20 年ほど前に福岡に来たという話題が出たところで、1960 年代の福岡の写真を一人ずつ渡した。

２－３展開―思い出の風景

福岡での生活が長いＫさんは、天神の街並みをみて、身振り手振りで百貨店（福岡玉屋や博多大丸）が過去に建っていた場所を伝えていた。市内電車やバスの話題になると、Ｙさんは市内電車よりバスを利用していたと語り、Ｔさんは大きく手を動かし興奮気味に「わざわざでも乗りに行っていた」と発言し、天神に出かけていたこと、デパートでは「いつものお客さん」と呼ばれていたと笑う姿がみられた。途中デパートの名前について質問されたことがＴさんに伝わっていないと感じたＫさんは、Ｔさんの耳元に顔をよせ「どこのデパートに行きましたかって」と対話のサポートをしていた。Ｔさんが記憶にあるデパートの場所について触れると、すかさずＫさんが、建物の位置を詳細に補足しようと口を開いた。また、写真と記憶にある百貨店をくらべながら「終戦後の大きな建物がないとき、駅からは市内の街が見渡せ、海側に家屋が並んでいた」、「（天神の町に）まだ肥取りの馬車が通っていた」、はじめて福岡に降り立った時は「もう見るものすべてがすごかった」と話し、当時の情景や心情を鮮明に回想していた。つづくＹさんが街の記憶を回想している間にＫさんが田中氏に話しかける場面や、Ｔさんの発言中にＹさんが声をかけ写真を指し示す姿もあった。



天神の街並み写真を使った対話の様子

中洲の街並み

話が途切れたところで、中洲の街並みに話題を移した。Ｋさんは、映画館や米軍向けのバー、キャバレー、料理屋などが軒を連ねた中洲の風景を丁寧に語っていた。Ｙさんは福岡の街をライトバンで通っていたこと、ＴさんはＹさんの話を受けて、家族と車（当時は珍しい外国車）で道を走ると周りが避けていたというエピソードを紹介し、周囲を笑いに誘ったところで時間を迎えた。

２－４感想と評価

約１時間のプログラムを終えた参加者からは疲れも見られたが「昔を思い出すと、いろいろある、感じることが。一番大きいことは、昔と違って福岡の町が変わったということ（Ｙさん）」、「１０代半ばの頃の話だけど、懐か

しくて涙がでるくらい。苦労もあったけれど、思い出は悪いことは覚えていない。楽しかったこと、嬉しいこと、感動したこと、その時の町の移り変わりを思い出したら懐かしく思った。こんな昔のことを思い出すと胸がわくわくする。その頃の大変だったことを思い出された（K さん）」、「みなさん元気でいるので私も体に気を付けて、私も頑張るぞーと思いました。気持ちが穏やかになった（T さん）」との声が聞かれた。

3．課題と展望

本プログラムでは聴覚的記憶という軸があり、それに応じるかたちでレコード鑑賞と歌唱の時間が設けられていた。写真はあくまで回想時の補助資料として想定していた。しかし、想定外に写真（街）の話に時間をとられた。また、話題も「私」と「街」に占められ、「家族」の話には結びつかなかった。限られた時間で質の良い回想を得てもらうには資料数の見直しと臨機応変に資料を使うことが必要であろう。写真資料については、家族的要素を含む行楽時の家族写真や結婚・子育てに関わる道具にすることでテーマに沿った回想ができたかもしれない。

一方、レコード鑑賞や歌唱の時間帯は、参加者自身が能動的でよい環境をつくり出していた。音を「きく」行為は自己や参加者間の緊張を和らげ発話以外の自発的行動につながり、歌唱という自己表現は会話への自信や他者への関心を強く引き付ける効果をもたらしていた。空間の雰囲気づくりや行動変化に音楽が効果的に作用したといえる。ただし、レコードは著作権の関係で原資料の使用が前提となる。資料の汚損破損のリスクに加え、音響機材の搬入出や設営の負担もかかることから恒常的利用には検討が必要であろう。その分著作権が失われた古い写真は、デジタル化により資料を保存しつつ、広がりをもった活用ができる点で有効な資料といえよう。

多様なバックグラウンドをもつ福岡の高齢者が家族について回想して語り合えるプログラムに整えるため、進め方や話題の振り方といった手法、用いる資料など、経験を振り返り改善を重ねることが今後の展望である。

Ⅳ　プログラム３回目「家族の想い出」 福岡アジア美術館のプログラム

1．プログラムの目的と意図

福岡アジア美術館（以下「アジ美」）はアジアの近現代美術を専門に紹介しており、現在、4,541 点の所蔵品がある。（令和３年 12 月時点）。また、毎年アジアからアーティストや研究者を招聘して滞在制作や滞在研究をおこなっていることから、滞在アーティストや研究者を軸に、市民を巻き込んだ作品制作や見学に来館する学校、一般、親子などを対象にしたワークショップ、トークイベントやシンポジウムなどを通した教育普及活動をおこなってきた。しかし、アジ美ではこれまで高齢者を対象とする教育プログラムの企画はあまりおこなってこなかった。

そこで、今回のシニアプロジェクトでは当館の所蔵品を用いた回想法がどのようにして実現するのか、試行的な実践をおこなった。本稿では、ファシリテーターである筆者が、作品の選定を含む事前準備、作品を活用した回想法プログラムの実施と結果について述べる。さらに、今後アジ美で高齢者を対象にした来館者プログラムを実施していくための課題について明らかにしたい。

2．事前準備

2－1 アジ美の所蔵品について

アジ美が所蔵しているのは、アジア 23 カ国・地域 [8] の作品（18 世紀以降）である。収蔵については、福岡

市美術館が開館した 1979 年以降 5 年ごとに開催してきた国際展「アジア美術展」およびアジアに関する企画展、アジ美が 1999 年の開館以来開催してきた「福岡アジア美術トリエンナーレ」を始めとするアジア美術の企画展などを通して拡張してきた [9]。このうち日本の作品については、福岡市美術館と役割を分担して、現地の近現代美術史に寄与した作家の作品やアジアとの交流の成果として当館が紹介した作品を収蔵しており、その他の日本の作品は福岡市美術館が所蔵することとなっている。つまり、日本の高齢者を対象に回想法を実施する際に一般的に用いられるような、対象者にとっての懐かしい日本の風景や親しんできた道具、それらを使った営みなどが表現された作品はアジ美には所蔵がないのである。このような状況で所蔵品をどのように回想法に活用すべきか、悩むこととなった。

２－２実施方法と作品選定

アジ美のテーマは「家族の思い出」であるため、始めにすべての所蔵品の中から家族をテーマやモチーフとして描いた作品を選んだ。当初の想定は、作品を大きめのカードにして机の中央にならべて参加者に見てもらい、その中から自身の家族について想起できるカードを参加者自身に選んでもらうようなイメージであった。しかし、聞き取りで参加者 3 人からかなり多くの個別の情報を聞くことができたことと、アジアの作品を見ただけで自分の家族についてうまく思い浮かべることができるかどうかが懸念されたため、筆者が予め参加者のライフストーリーに関連づけられそうな作品を選定し、こちらの投げかけから語りを導き出すような方法に切り替えることとした。

最終的な作品の選定については、前述した通り、介助者である田中氏による事前インタビューと 2 月 2 日に 3 館合同で実施した聞き取り、2 月 9 日の第 1 回実施での参加者の語りから個別にまとめたリストを作成し、そこから作品と関連づけが可能なキーワードを抽出したうえで、それにちなんだ作品を 11 点選んだ。そしてアジ美の外観写真を加えた 12 枚のカードを作成してみのり荘に送付し、当日は筆者の進行に合せて指定した作品を見てもらう形式にした。さらにシナリオ作成の段階で参加者への投げかけに使用する作品を 6 点とし、ほかの作品は話題が広がった場合に活用することとした。

３．実施と結果

今回は窓から外の景色が見える部屋で参加者の入浴直後におこなわれたためか、リラックスした雰囲気の中での開始となった。一時的に田中氏が不在になった場面でも、筆者に「今日はいいお天気ですね」と参加者の方から声かけがあり、窓の風景から筍の調理の話題が出るなど、前回の経験もふまえ緊張なく臨めている様子が窺えた。「わたしは耳が遠いから、あなた聞いてね」とほかの参加者に助けを促すなどのコミュニケーションもみられていた。

筆者からは始めに「個別に作品を準備したので、作品を見ながら思い出した話を聞かせてほしい」と伝えた。

Y さんの回想には、父は海軍で不在がちだったため母に甘えてばかりいたという子ども時代の事前の語りをもとに、作品①を提示し、両親の性格やそれぞれの思い出について語ってもらった。続いて母の実家がイワシ網漁をしていたとの語りから②を提示したが、実際の経験と作品がかなり違っていたため違いについて語ってもらった。さらにお酒好きとの語りから③を提示し、仲間の話やどのような機会に飲んだかなどを語ってもらった。Y さんは終始穏やかで自家製の酒造りのエピソードなどは茶目っ気を交えながら語った。

T さんの回想には、Y さんの話に続いて両親についての思い出を語ってもらい、5 人兄弟の長女で兄弟の世話をしていたとの事前の語りから④を提示したところ、兄弟で海外旅行に出かけた話などが語られた。T さんは他の二人の語りについても頷きながら熱心に耳を傾けていた。さらに⑤を提示し実家の農業の暮らしについて語っ

てもらった際には、Y さんは作品を細部まで注意深く見ながら関連した思い出について語った。

K さんの場合は、父との思い出を嬉しそうに語り、苦労が多かった母の生い立ちに関連して⑥を提示したところ厳しかった母の思い出や結核で亡くなった姉のことを思い出して涙をこぼすなど、様々な思いが溢れる語りとなった。涙を拭く K さんを T さんが優しく微笑んで励ますなどのコミュニケーションも見られた。

回想後には、同日の午後に通常も施設で実施されている絵画教室の中で「家族の思い出」をテーマに絵画を制作してもらった。

〔使用した作品〕

①

②

③

④

⑤

⑥

①ソン・ヨンピン/宗永平（中国）《私の父母》②ティンルイン（ミャンマー）《市場の日》③スヴァーイ・ケーン（カンボジア）《まず一家の長を敬いなさい》④ヤウ・ビーリン（ベトナム）《庭を歩く》⑤リウ・ロンフォン/劉栄楓（中国・日本）《満洲の収穫》⑥ホウ・ルル・シュウズ/候淑姿（台湾）《彼方を臨んで－アジアから来た花嫁の歌 Ⅲ：ベトナムの黄氏戀の家族（A）（B）》【作家名（出身もしくは活動国・地域）《作品名》】

4. 考察と課題

今回のテーマが「家族」という普遍的なものであったため、参加者は非常に感情豊かに回想をおこなっており、他の参加者の語りにも耳を傾けながら内容に共感する場面が前回よりも多く見られた。ファシリテーションについては、常に次の進行を考えながら話を聞くことの困難さを実感した。Y さんが酒宴の思い出を語っている間に K さんは何度も涙を拭いており、筆者がその様子を注視できていなかったため、プログラム終了時に K さんへの十分な声かけができなかったことが大きな反省点である。K さんは感情の起伏が大きい前頭側頭型認知症であり、亡くなった姉のことを思い出した際には、情動が刺激されるような回想がなされていたことが推察される。なお、他の 2 人はアルツハイマー型認知症である。

作品の活用については、今回は回想のきっかけとして提示したが、参加者から作品の印象や描かれている細部についての言及もあったため、今後は作品鑑賞をおこないながら糸口を見いだして回想に結びつけていくような方法を模索していく必要がある。

Ⅴ　プログラム 4 回目「思い出のサクラ」 福岡市美術館のプログラム

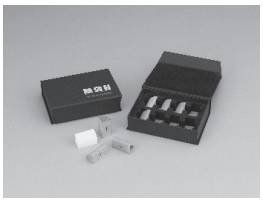
1．準備

福岡市美術館（以下「美術館」）では、認知症患者向けではないが、2014 年より高齢者向けに「いきヨウヨウ講座」を実施している。この講座の第一回目となる「わたしのサクラ、わたしの梅」では、桜が、年齢に関わらず普遍的なテーマとなりうることが示された [10]。そこで、本プログラムにおいても、この経験を参考に、テーマを「思い出のサクラ」とし、内容を考えることとした。また、筆者自身のニューヨークでのアルツハイマー型認知症患者のためのプログラム視察などの経験も活かし、回想法に加え、作品鑑賞と制作も盛り込むこととした。ただし、オンラインでのプログラムであるため、作品鑑賞については、当館の所蔵作品の精巧な複製画を制作することと

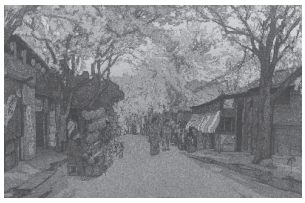
した。しかし、美術館には 16,000 点の所蔵作品があり、その中でも「桜」をモティーフとしたものは複数ある[11]。まずは著作権のことを考慮しつつ、参加者から心理的に遠くなる画題（例えば源氏物語図など）は除外することとし、参加者の年齢も考え、冨田溪仙《御室の桜》（1933 年）を取り上げることとした。また、空間的な演出ということも考え、ある程度の大きさを確保して、本作品を約 60 パーセントの大きさに縮小した複製屏風を作成した。さらに、視覚だけでなく、触覚や嗅覚を刺激することも、認知症患者に向けてのプログラムでしばしば使われるということを踏まえ、美術館の既存のアウトリーチプログラム「どこでも美術館」の教材の一つである「彫刻素材ボックス」も使用することとした[12]。この教材には彫刻素材に利用される木片や金属片などが入っており、その一つとして桜の木片も入っている。また、話題を膨らませることを前提に、桜の版木を使ったことで知られている、吉田博《櫻八題　花盛り》（1935 年）のほぼ実物大の複製画も用意することとした。なお、冨田溪仙は福岡市出身、吉田博は久留米市出身ということや、前述したが、制作年が参加者の年齢に近いなど、回想法に結びつけられるかもしれないということも、本作品を選定した理由の一つでもある。また、制作要素として、前回のプログラムと同様、回想法終了後の午後に絵画教室があるということで、そこで桜の思い出を描いてもらうこととした。ただし、特にアルツハイマー型認知症の場合「思い出して描く」ということが難しいことが前回のプログラムでわかったため、かつ、これまでも高齢者プログラムで「手本」など何らかのガイドがあると安心して制作ができるという経験から、《御室の桜》から桜の幹と枝の一部を抜き出して写した画用紙を作成し、その枝に花を描いてもらうこととした。

以上、プログラム実施前に、《御室の桜》の複製、桜を含む木片数種、《櫻八題　花盛り》複製、そして幹と枝のみがプリントされた画用紙、クレパスなどを、みのり荘に運び込んだ。なお、複製屏風の設置については、順番等を田中氏にお伝えし、場所等については任せることとした。

冨田溪仙《御室の桜》
（1933 年）
【作家名《作品名》（制昨年）】



彫刻素材ボックス



吉田博《櫻八題　花盛り》
（1935 年）
【作家名《作品名》（制昨年）】

2．プログラムの内容

まずは屏風の鑑賞からプログラムは始まった。最初、Y さんが屏風に背を向ける形で 3 人が向かい合って座っていたが、屏風の鑑賞をおこなうため、屏風と 3 人が向かい合う形で座ってもらった。ファシリテーターが、屏風について「なんの絵かわかりますか？」という質問を投げかけると、数秒見た後に、「きれいですね」「桜かな」「紅梅」「一つ一つ色が違いますね」などという発言があった。3 人とも作品によく見入っており、花の色や形についても言及していた。ひとしきり、鑑賞をした後に、「何か桜について思い出がありますか？」と問いかけたところ、K さんからは、電車に乗って動物園近くに花見に行ったこと、夫がお酒を飲んで酔っ払い、柵を乗り越えて動物園に入って行こうとしたことなどかなり具体的な思い出について語られた。また、七輪を借りて桜の木の下で食べ物を焼いたり温めたりして食べたことなどを話した。Y さんからは、お子さんが小さいときに家

族と車に乗って西公園や平和台（いずれも福岡市内）に花見に行き、お菓子を食べたことなどの思い出について話をされた。また、Kさんが「七輪を借りたりしませんでしたか？」と問いかけると、Yさんが「いや、借りなかった。お菓子などしか食べなかった」と応じるなど、対話が見られた。Tさんは、最初は思い出せないと言ってたが、家の近くの公園に桜のトンネルのようなものがあり、そこを通るのが楽しかったと徐々に思い出して話し出した。

Tさんから、「桜の木肌がきれいだ」という話がでたところで、彫刻素材ボックスの中から桜の木片を取り出してもらった。熱心に触るなど興味のある状態が見られ、Tさんからは「桜は工芸品にも使われるのか？」という質問がでた。ここで、吉田博《櫻八題　花盛り》を鑑賞。本作は、桜の版木を使った版画作品であることを説明した。鑑賞しながらさらに桜の思い出について尋ねると、Tさんから「桜の花びらがお弁当に落ちてきて、一生懸命見ていたけど、でもお腹に入れてしまおうと思ってそのご飯を食べたの」という非常に具体的でかつ詩的な表現の言葉が述べられた。Yさんからは、自分の故郷で、小さい頃水源地に桜があったこと、ご両親と一緒に桜を見て疲れたことなど故郷の思い出が語られ、Kさんから大濠公園の堀端に咲く桜の花の思い出が語られた。

３．効果と課題

プログラムも４回目となると、参加者も非常にリラックスしていた。参加者同士で、お互いに気遣いあったり、対話が生まれたり、また特に話しているときに笑顔が多く見られるなど、気持ちが活性化しているのがわかった。また、地名などの単語や数字などが具体的であるなど、記憶についての効果も見られた。プログラム終了時には、「楽しかった。いろいろな思い出が走馬灯のように浮かんだ」「話していると、だんだんと思い出が広がって、そうだったんだ！と思う。楽しかった」「他の人の話を聞いて思い当たることがあった」などの感想を得ることができた。今回、作品を鑑賞するだけでなく、木片を使用したが、参加者は、ずっと手に持っていたり、何度も触るなどしていたそうである。「触れる」ということが、気持ちを落ち着かせたり記憶をよみがえらせる補助になったことがうかがえよう。また、複製屏風で空間を作ったことは、参加者だけでなく他の施設利用者にも、気持ちの高揚が見られたとのことであった。ただし、今回は屏風を見る、木片を触る、手元でもう１点作品を見るという３つの動きがあったため、介助者の負担が大きかったこと、多様な動きがあったためにファシリテーターの質問が参加者にスムーズに伝わりにくかったことなどが反省点として挙げられる。しかし、このような変化に富んだ動きは、参加者には大きな刺激になったことは確かなようである。なお、終了後の絵画制作については、次章に譲ることとする。

Ⅵ　振り返り

３館のプログラムを終了した２日後に再び参加者に集まっていただき、館ごとに今回のプログラムの感想についてコメントをもらった。

博物館からの、曲を聞いたり写真を見てどれくらい昔のことを思い出せたかという問いかけには、３人とも楽しかった、懐かしかったといった満足感を示していた。程度については自身を客観視することが容易でなく、博物館のプログラムの内容を思い出したところで再び回想の語りが始まり、同じ話を何度か繰り返される場面もあった。しかし参加者は互いの語りに耳を傾け、回想の時間を大いに楽しんでいる様子であった。

アジ美からは、回想法の後制作した「家族の思い出」をテーマに描いた作品についての話を聞いた。参加者は、作品を指で示しながら表現した内容について説明する際にも、当時の思い出を細かく回想していた。作品について他の参加者に感想を求めたところ、作品の印象や上手い点などを指摘すると同時に、その作品から思い出される自分の思い出についても共感を持って語った。描かれた内容について、参加者同士が質問することもあり、３

回のプログラムを経て互いの距離がさらに近づいた印象を受けた。

美術館も回想法の後に制作した「私の心の中のサクラ」について、作品を見ながら話を聞いた。予め幹が下絵に描かれた画用紙を用いて制作したため、構図が同じであることから、個性による表現の違いが明白に表れていた。他の参加者に作品についての感想を求めると、○○さんの気質が表れている、などこれまでの回想では語られなかった個人の性格やその人への思いなどについての言及があり、大きなジェスチャーに併せて肩や脚をさすったりするなどのスキンシップも多く見られていた。最後に、またこのような機会があれば参加したい、美術館にも行きたいから連れて行ってほしいといった前向きな依頼もあり、振り返りの時間を終えた。

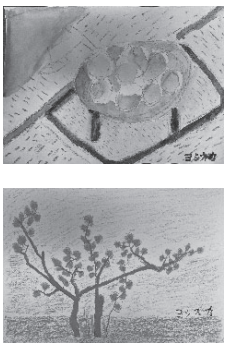
参加者に感想を聞いた後、実施した３館の担当者、助言者である古村美津代氏らで介助者の田中氏に今回のプログラムについての感想を尋ねた。参加者には明らかな変化がみられたが、今回のプログラムは積極的に語っている参加者の様子を見た施設の職員、参加者の家族にも様々な影響があったと言う。田中氏自身もそれまで注視してきた参加者の生活行為に加えて、プログラムを実施する過程で参加者の人となりが見えてきて、参加者との距離感が大いに縮まったと話した。古村氏からも､回想法の効果は施設利用者のみならず施設職員にとっても、施設利用者のこれまで生きてきた人生に触れることにより、その歴史や背景への理解を深めるきっかけとなり、今後の支援の方向性が変わるのではないかという指摘があった。これらのことから、今回のプログラムは、美術館、博物館にとっての高齢者プログラムの開拓のみならず、参加者自身や参加者をとり巻く家族および介護施設の職員にとっても意義のある試みであったと言える。

〔参加者の作品〕

Ｋさんの作品

Ｔさんの作品

Ｙさんの作品



振り返りの様子

Ⅶ　評価者より

５回のプログラムが終了し、結果として、参加者にも施設職員にも良い影響が見られたように思える。しかし客観的に見て本当にそうだったのか、また今後我々はどうすべきなのか、評価者である古村氏、奥村氏にも、プログラムの評価・今後の展望についてご寄稿いただいた。

美術館・博物館による回想法の評価１　　古村美津代（久留米大学医学部看護学科　老年看護学　教授）

近年、回想法は医療福祉施設のみならず、社会福祉協議会や博物館等において様々な取り組みがなされている。今回、新型コロナウィルス (COVID-19) の感染拡大により、福岡博物館・福岡アジア美術館・福岡市美術館が各々の所蔵品を活用しオンラインによる回想法を実施した。参加者は、これまで同じ小規模多機能型居宅介護事業所を利用していたが、お互いに話す機会はなかった。しかし、「思い出の歌」では、レコードプレイヤーにより約50 年前の懐かしの歌謡曲が流れると、参加者全員が机をたたきながらリズムをとり歌い出した。その後、当時

の町の情景や町を通る電車について等様々な思い出が語られた。更に施設内では自分のことはあまり語らない参加者が、炭坑節を歌い出し、他の参加者も一緒に歌い、曲の終わりには全員から拍手が起こり笑顔になった。また、複製屏風・桜の木片を活用した桜の思い出や家族の回想では、幼少期の肉親や兄弟の思い出から忘れかけていた記憶や断片的な記憶が鮮やかに蘇り「今思えば一生懸命育ててくれたなぁと思います」「すごく優しい父親だった」との語りも聞かれた。最後の会では「皆さん、元気でいらっしゃいますので私も頑張るぞと思います」「お話して気持ちが穏やかになりました」「本当に楽しくすごさせていただきました。昔のことを思い出すと、胸がわくわくするし、その頃の苦しかったこと、大変だった事をつくづく思い知らされました。ありがとうございました」という言葉が聞かれた。参加者は、回想により昔の記憶を辿り、過去の出来事、出会った人々、懐かしい場所や景色、聞き覚えのある歌、昔に味わった食べ物等、様々な思い出を想起し、そして笑顔になった。更に参加者は、自分の人生、大切な人とのつながり、親から注いでもらった愛情や様々な苦難を乗り越えてきた「強い自分」を再確認し、自信や誇りを取り戻し、今を立ち向かう勇気を持つことが出来たのではないか。

開始当初は、参加者それぞれが画面に向かって聴き手の質問に答え、聴き手の声が聞き取りにくい時は、施設スタッフが参加者に聴き手からの質問内容を伝えていた。しかし、回を重ねるごとに、難聴気味の参加者に他の参加者が聴き手の質問を伝え、参加者同士のコミュニケーションにつながっていった。また、お互いの経験を聴き、声を出して笑う場面や一緒に涙を流す場面、頷きあいながら共感する場面が多く見られるようになった。更にオンライン開始前に互いの身づくろいを気遣う場面や視線を合わせ会話する場面、肩に触れるなどのボディタッチの場面が多く見られるようになり、3 人の関係性が深まっていった。回想終了後も施設内で参加者同士の会話の場面が見られるようになり、スタッフに対して過去の思い出を語る場面が多くなったことが施設スタッフより報告された。同じ時代に生き、同じ空間で時を過ごし、懐かしい話を共有することにより参加者同士の心的距離が近づき、お互いに安心できる「なじみの関係」が築かれたのではないだろうか。

参加者の家族 (娘) からは、「これまで聞いたことのない話を嬉しそうにしていた」「(昔の写真を取り出し) 多くの思い出を語り、(親との) 思い出話のきっかけになった」等の言葉が聞かれた。家族にとって親のこれまでの経験や人生を理解することは、今後の生活に大きく影響するのではないかと考える。また、企画当初から参加者の回想法に関わってきた施設スタッフは、これまで知らなかった参加者の様々な経験を知り、参加者へ畏敬の念をいだくとともに、思い出を語る参加者の生き生きとした表情や自発的な発語、参加者同士が互いに気遣うことや互いの話を聴き受け入れる姿勢等から参加者それぞれが持つ力を再発見できたと考えられる。さらに今回の企画に携わったスタッフ全員が、参加者個々の人生を知ることにより、その方が生きてこられた人生体験やその方の価値観を理解することができ、一人ひとりのかけがえのない人生の尊さを学ぶことができた。

回想法を実施する際には、事前に年代に合わせた時代を理解するとともに参加者個々の背景を理解することが必要である。さらに、聴き手は、参加者のペースを尊重し心を込めて聴くことが重要である。しかし、これまでの人生で経験した出来事は、必ずしも楽しいことばかりではない。本人にとって嫌な思い出や話したくない体験を無理に引き出そうとすることは厳禁である。今回の聴き手のほとんどが、回想法は初めての経験だったが、事前に参加者の視力、聴力、生活史などの情報を把握するとともにオンラインの中の参加者の表情や言動をよく観察しよい聴き手となっていた。実施の中で、姉の死を回想し涙ぐむ場面もあったが、高齢者の話を聴き、深く共感し、誠実に関わることで参加者と聴き手の間に信頼関係が構築された。

福岡市博物館・福岡アジア美術館・福岡市美術館が各々の所蔵品を活用したオンラインによる回想法において、参加者は、話を聴き共感してくれる人や場を得ることにより、困難を乗り越えてきた自分自身に自信と誇りを取り戻し、笑顔になった。今後は、このグループ回想で得られた参加者個々の強みを施設ケアにつなげ、その人らしさや強みを活かした個別のケアにつなげていく必要があると考える。また、博物館、美術館と施設をつないだ今回のオンラインによる回想法は、地域づくりや世代間交流などの新たな広がりが期待される。

美術館・博物館による回想法の評価 2　　奥村俊久（筑紫野市教育委員会）

筆者は、筑紫野市歴史博物館在籍時に地域回想法に関する事業を行った経験があることからか、今回のプログラムに関わらさせていただくこととなった。福岡市の特性の異なったミュージアム３館で順に回想法セッションを実施するということであるが、うち２館は美術館である。さらに、コロナ禍なのでリモートで行うという。それまでの筆者の回想法に関する経験からは事前にイメージを十分持つことができないままの参加であったが、セッションが進むにつれてその可能性を大いに感じることができた。セッションの内容については先に述べられており、筆者はプログラムを通して感じた成果と課題について述べさせていただき、最後に今後の展望について記したい。

成果と課題について、以下のようにまとめた。

① リモートでも回想法の進行が可能であるということが確認された。但し、一般的には 10 人程で行うことが多いが、システムや参加者同士のコミュニケーションをとるうえの距離感も考えると５人を超えるのは難しいと思われる。

② 施設の担当者がコ・リーダー [13] として積極的な役割を果たしていただき、今回の成果を生む一つの要因でもあった。回想法を行うにあたり、今後も施設側と回想法についての理解と十分な意思疎通を行っておくことが必要である。このプログラムではないが、時に施設職員も楽しくなって回想に参加してしまうことがある。

③ ミュージアムからの回想法は、歴史系博物館や歴史民俗資料館で民具等を利用した実践例が多いが、今回は美術館からの回想法の可能性が示された。特に屏風による空間演出や木版画、セッション参加者が描いた思い出の絵を素材にした回想の実践はその可能性を大きく広げることとなった。

④ 博物館はもとより美術館資料を用いて、回想法による認知症高齢者のＱＯＬを向上する可能性は見えたが、学芸員にリーダーとしてセッションを回していくトレーニングや経験がまだ必要と思われる。また、資料の選択や上手くいったところ、上手くいかなかったところの改善などを継続してノウハウを蓄積していく必要がある。

⑤ 最初と最後では、同じ方のセッションと思えないくらいに変化がみられた。地域回想法などでもいえることであるが、通常８回程度のセッションの中盤から変化が見え始める。回想法として効果をあげるためには、セッションの回数を増やす仕組みを考えるべきだと考える。

⑥ セッションの進行では、空間や時間認識の話題に向くように気を配られていたが、全体として生活経験の話しとなり、情緒的な話となりがちであった。それはそれで良いと思うが、むしろ使う資料数を減らして、資料から出てくる話題の具体的な内容を、ゆっくり思い出すような場の作りが必要でないかと思われる。

最後に、今回のプログラムの展望について考えてみたい。

福岡市の人口増加率は 2020 年の国勢調査の速報値で、前回調査同様に全国の政令指定都市で最大だった。流動人口も多く、人口移動が少ない地域と比べて共通の社会背景をもつ人は小さいように感じる。しかし、今回の参加者の出身は３人とも県外、または福岡市外でありながら回想法による効果をみることができた。

福岡市の 65 歳高齢者人口は令和２年のデータで約 367 千人、高齢者人口比は 23.4％で、決して少なくはない。認知症に対する取り組みは、文化庁の当該事業の目的にもあるように重要な社会課題となっている。このプログラムに関わり、館側の普及活動の一つという見方も感じたが、高齢者のＱＯＬの向上はもちろん、これからの高齢者は地域づくりに欠かせない人材となっている。このような社会課題に対し、美術館、博物館はどのように考えていくのか。また、施策にどのように関与していくのかという視点が求められている。当然、市内すべての高齢者を対象とすることはできないが、コミュニティ推進部局や介護・福祉関係部局、また社会福祉協議会などとのネットワークをもとに、地域コミュニティやふれあいサロンなどを通じた地域活動の支援など積極的にミュージアムが社会に出ていく契機にもなるのではないだろうか。

Ⅷ　終わりに

日本は超高齢社会となっており、福岡市も例外ではない事は、「Ⅰはじめに」でも述べたとおりである。本プログラムは、そのような社会に対応し、美術館・博物館の活動が高齢者の生活の質を向上させることができるのではないか、という期待のもと実施した。古村氏、奥村氏の評価にもあるように、そのことは十分に示されたのではないだろうか。しかし、1度きりの活動では、ただやったという事実しか残らない。継続することで新たなファシリテーターの育成、新たな手法の開発、さらにはコミュニティの醸成が可能になる。

今後は、両評価者が述べているように、3館で連携していくだけでなく、他施設や地域とのネットワークを築きながら、この活動を継続し、かつ拡大していける道を模索していきたい。

＜註＞

（1）執筆については次のように分担した。・鬼本佳代子：Ⅰはじめに／Ⅱプログラム1回目　オリエンテーション　参加者への聞き取り／Ⅴプログラム4回目「想い出のサクラ」福岡市美術館によるプログラム／Ⅷ終わりに　・河口綾香：Ⅲプログラム2回目「思い出の歌は何？」 福岡市博物館のプログラム　・蒲池昌江：Ⅳプログラム3回目「家族の想い出」福岡アジア美術館の回想法プログラム／Ⅵ振り返り

（2）総務省統計局「1. 高齢者人口」『統計トピックス No.129　統計から見た我が国の高齢者―「敬老の日」にちなんで―』（ https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1291.html　閲覧日 2021 年 12 月 14 日）

（3）厚生労働省「認知症」『知ることからはじめよう　みんなのメンタルヘルス』（https://www.mhlw.go.jp/kokoro/know/disease_recog.html　閲覧日 2021 年 12 月 15 日）

（4）内閣府「３．高齢者の健康・福祉」『平成 29 年度高齢者白書（概要版）』（https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1_2_3.html　閲覧日 2021 年 12 月 15 日）

（5）日本博物館協会『博物館の望ましい姿シリーズ 11　誰にもやさしい博物館づくり事業　高齢者プログラム』（2007 年）

（6）奥村俊久「筑紫野市歴史博物館での回想法導入の経緯について」『筑紫野市歴史博物館　年報 16』（平成 26 年）pp.38-48

（7）奥村俊久　前掲書

（8）バングラデシュ、ブータン、ブルネイ、カンボジア、中国、インド、インドネシア、韓国、ラオス、マレーシア、モルディブ、モンゴル、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ、ベトナム、北朝鮮、日本

（9）福岡アジア美術館は、福岡市美術館のアジアの近現代部門を独立させて創設した美術館である。

（10）鬼本佳代子「福岡市美術館における高齢者プログラムについて～内容・意義・課題～」『福岡市美術館研究紀要　9号』（2021 年 3 月）pp.19-27

（11）所属品検索で「桜」および「花見」で検索すると、38 点あった。

（12）鬼本佳代子　前掲書、及び「休館中におけるアウトリーチ活動「どこでも美術館」について」『福岡市美術館紀要　7号』（2019 年、福岡市美術館）pp.1-6

（13）回想法では、問いかけ等、対話のきっかけをつくり、話を整理・集約してさらに次の話題提供を行う役割の者をリーダー、その補佐役として参加者に対して問いかけを繰り返したり言い換えを行ったりする役割の者をコ・リーダーという。ただし、美術館ではあまり使用しない言葉であるため、本論執筆者は、美術館でリーダーと同様の役割の者をさしてつかう「ファシリテーター」を使用した。

近代における仙厓顕彰をめぐる覚書
－福岡市美術館蔵 仙厓義梵筆、太室宗宸賛《寒山拾得図》の紹介を兼ねて

宮田太樹

はじめに

仙厓義梵（1750 ～ 1837）は江戸時代に活躍した臨済宗の僧で、日本最初の禅寺である博多・聖福寺の住持を務めた。住持を隠退した後は隠居所である虚白院（現･幻住庵敷地内）に移り住み、生涯博多の地で暮らした。親しみやすさの中にも、処世術や人生訓などを含んだ仙厓の書画は在世中より人気を博し、仙厓のもとには揮毫を求める人が絶えなかったという。

こうした事情もあり、仙厓の書画は彼にゆかりの深い聖福寺や虚白院よりも、市井の人びとの間に多く伝わっており、とりわけ、仙厓の第二の故郷ともいうべき福博では多くの個人コレクションが形成された。

博多出身の近代木彫家である山崎朝雲（1867 ～ 1954）も､仙厓に傾倒し作品蒐集に努めた人物の一人である。朝雲が仙厓作品を蒐集していたことは、展覧会の出品目録やカタログ、書簡などから知られていたものの、そのほとんどが所在不明となっていた。

こうした中にあって、去る 2020 年度に福岡市美術館に収蔵された仙厓義梵筆、太室宗宸賛《寒山拾得図》（以下、本作とする）は軸裏の印章や展覧会の出品履歴などから山崎朝雲の旧蔵であることが確実視できる貴重な作例である。

筆者は本作の旧蔵者である山崎朝雲の事績を調べる過程で、朝雲が、当時幻住庵の住職を務めていた韜光玄譲（1876 ～ 1948）に箱書を依頼した 1924 年（大正 13）が仙厓顕彰を考える上で重要な意味を有する年であることを認識するに至った。そこで、本稿では、本作の概要を簡単に紹介したのち、箱書や山崎朝雲の事績を通して、近代における仙厓顕彰活動の一端を明らかにすることを試みたい。

１章　作品概要

品質形状：紙本墨画　掛幅装
員数：１幅
法量：縦 90.0㎝　横 27.1㎝
印章：白文方印「仙／厓氏」
賛：白文長方印「如嬰」「得月忘指争似得／喪両忘今将非指／指無月何得何喪／傷人曳帚如聾／如唖只要掃蕩／宗宸慢題」白文聯印「太室」

画面の手前に箒を手にした拾得、奥に巻子を持ち、上方を指さす拾得を描く（口絵 1)。二人の人物の表情はいずれも目じりが下がり柔和な印象で、特に寒山は笑みを浮かべることから親しみやすさを感じさせる。拾得の衣は輪郭線のみで描かれるのに対し、寒山のそれは輪郭線を用いず幅広の墨線を横に連ねて描かれている。

全体に穏健な画風と言ってよく、仙厓の人物画によくみられるデフォルメはない。一方、寒山の左手を見てみると巻子を握れていないことに気が付くが（図１）、この描写から当時の仙厓の画技の水準を推し量ることがで

きよう。

仙厓が 1811 年（文化８）、62 歳の時に聖福寺の住持を隠退し、翌年に虚白院へ移り住んだのを契機にその画風を変化させたことはよく知られている[1]。隠退前は、仙厓が多く用いた落款にちなんで「百堂時代」とも呼ばれ、謹直な画風を旨とし画業の研鑽期にあたるとみなされている[2]。隠退後は彼の隠居所にちなんで「虚白院時代」と呼ばれ、徐々にのびやかな画風を獲得し、自由でおおらかな作画を行った時期である。

上記の理解に従えば、本作が百堂時代の作例に該当することは明らかだろう。例えば、50 代後半の制作と推定される《寒山拾得図》（九州大学文学部蔵）（図２）は、人物を手前と奥に配置する構図や、寒山と拾得とで衣装の配色や運筆を対比させる点に共通する感覚を見出すことができる。

図１　仙厓義梵筆、太室宗宸賛《寒山拾得図》
（福岡市美術館蔵）（部分）

図２　仙厓義梵筆《寒山拾得図》
（九州大学文学部蔵）

また、本作に捺された「仙厓氏」の白文方印（図３）は、数は少ないものの、仙厓の画業の最初期にあたる 50 代前半に使用例を見出すことができる[3]。これらを勘案すると本作は仙厓が 50 代前半に描いた作品とみて大過ないだろう。

なお、ここで賛を記した太室宗宸（1763 ～ 1847）について触れておきたい。太室宗宸は大徳寺真珠庵の第 20 世を務めた禅僧であるが[4]、仙厓との交友を示す事績は管見の限り知られない。

ただし、博多崇福寺の第 87 世であった曇栄宗曄をはじめ、仙厓と親しく交わった大徳寺周辺の僧侶は多くおり、彼らを通して知遇を得たと考えることは可能だろう。

仙厓が 50 代で本作を描いたとすると、当時、太室は 30 代半ばとなり、作画と着賛を同時と考えても大きな矛盾はない。

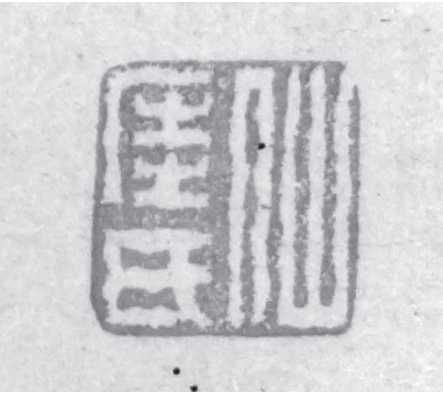


図３　仙厓義梵筆、太室宗宸賛《寒山拾得図》（福岡市美術館蔵）（部分）

２章　近代における仙厓顕彰

前章では本作の概要および仙厓の画業における位置づけを確認した。本章では視点を変えて本作の旧蔵者であった山崎朝雲の事績を手掛かりに、近代における仙厓顕彰活動について、その一端を明らかにすることを試みたい。

２－１　山崎朝雲と仙厓

本作の軸裏には博多出身の近代木彫家である山崎朝雲（1867 ～ 1954）の所蔵であることを示す「羯摩蔵」印が捺される（図 4）。また、仙厓三昧会の主催した遺墨展に出品した際の題箋（図 5）および、出品に対する御礼状（1935 年（昭和 10）5 月 8 日付）（図６）が作品とともに伝わっており、本作が山崎朝雲の旧蔵であることは疑いない[5]。

図４　《寒山拾得図》の軸裏に捺された印章

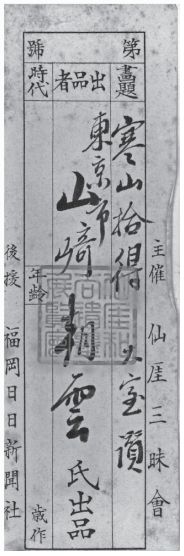


図５　仙厓三昧会主催遺墨展の題箋

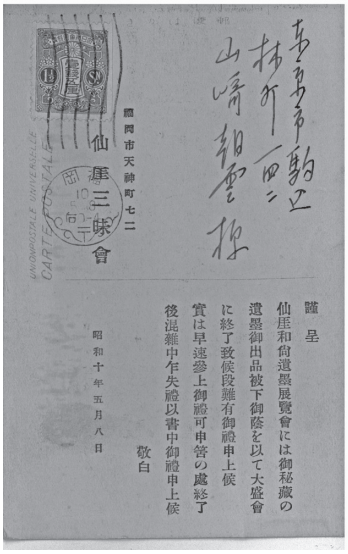


図６　仙厓三昧会主催遺墨展出品に対する御礼状

冒頭に述べたように、山崎朝雲が仙厓作品の熱心な蒐集家であったことは、展覧会の出品目録をはじめとするいくつかの資料によって知られている。まずは、以下の考察の前提となる朝雲と聖福寺との関係について、朝雲の弟子である冨永朝堂の言説を参照しつつ、簡単に触れておきたい[6]。

博多櫛田前町（現・博多区冷泉町）に生まれた朝雲は、17 歳の時に福岡の仏師である高田又四郎へ弟子入りする。高田又四郎の下で学んだのは 3 年ほどで、この時に聖福寺第 128 世住職であった東瀛自関より教えを受けることがあったという。

その後、東京へ拠点を移し、彫刻家としての実績を重ねていたが、1916 年（大正 5）、49 歳の時に肺炎を患い福岡で転地療養を行うこととなる。その際、東瀛自関の下へ寄寓し、同僧より薫陶を受けたことをきっかけに、聖福寺のための仏像制作に意欲的に取り組むようになった。幻住庵の住職であった韜光玄譲と知遇を得たのも、おそらくはこの頃であっただろう[7]。朝雲が本格的に仙厓作品を蒐集するようになった時期は明らかでないが、聖福寺、幻住庵との関係が深まっていった 1916 年（大正 5）以降と考えてよいだろう。

以上を念頭に置きつつ、改めて朝雲旧蔵の仙厓作品をみていく。本作を納める箱の蓋裏（図 7）には「大正十三年甲子小春日　現幻住韜光拝題（朱文方印「竹皮」）」とあり、幻住庵第 15 世であった韜光玄譲（1876 ～ 1948）が 1924 年（大正 13）に箱書を記したことが分かる。

この箱書のみでは、事の詳細は判然としないものの、同じく山崎朝雲の旧蔵になる別の仙厓作品（個人蔵）の箱書（図 8）には次のように記される。「大正十三年甲子仲冬於聖福寺三（ママ）門閣上安置十八阿羅漢並ニ虚白院安置／仙厓禅師彫像等開眼式挙行之時山崎朝雲氏帰省携来仙崖（ママ）禅師揮／毫之軸拾数点于予請筐題以為紀念不顧不徳塞責云　現幻住韜光誌（朱文円印「竹皮」）」。

図 7（左）《寒山拾得図》箱蓋裏墨書
図 8（右）　仙厓作品（個人蔵）箱蓋裏墨書

すなわち、1924 年（大正 13）11 月、聖福寺山門に安置された十八羅漢像と虚白院に安置された仙厓禅師像の開眼式のために朝雲が帰福した際、仙厓作品十数点を携えており、韜光玄譲へ箱書が依頼されたという。

本作の箱書もこの時に記されたとみて大過ないだろう。なお、箱書に記される「十八阿羅漢」[8]と「仙厓禅師彫像」[9]は、いずれも朝雲の制作によるもので、自身がてがけた像の安置を見届けるために帰福したようである。

ところで、「仙厓像開眼式」（『福岡日日新聞』1924 年（大正 13）11 月 29 日掲載）によると、山崎朝雲が制作した仙厓和尚像は、1918 年（大正 7）には既に完成し幻住庵に安置されていたものの、開眼式が執り行われたのは 6 年後の 1924 年のことであったという。一般に、像が完成してから開眼式まで 6 年もの歳月を要するということはなく、事実、同じく朝雲がてがけた羅漢像は、1924 年 11 月 1 日に最後の 3 体が完成した後、同月 23 日には開眼式が行われている。

結論を先に述べるならば、仙厓像が完成から 6 年も開眼式が行われなかったのは、安置堂宇がなかったためである。この安置堂宇の問題を解消する契機となったのが、1924 年（大正 13）に結成された、仙厓和尚遺蹟保存会の活動であった。以下、同会の活動について節を改めて見ていく。

２－２　仙厓和尚遺蹟保存会の活動と山崎朝雲

朝雲が幻住庵に安置するために制作した仙厓像が 1918 年（大正７）に完成していたことは、先述の『福岡日日新聞』の記事および、韜光玄譲が朝雲へ宛てた書簡 (10) から判明する。だが、像を安置する堂宇がなく幻住庵の本堂に仮安置されたまま、数年が経過してしまったらしい (11)。

その後、1924 年（大正 13）4 月頃に仙厓和尚遺蹟保存会が組織され堂宇再建の目途がたったことを契機とし、同年 11 月に執行される山門羅漢像の開眼式とあわせて、仙厓和尚像開眼式も実施される運びとなったようである (12)。

実は、この仙厓和尚遺蹟保存会こそが、昭和期に巻き起こった仙厓ブームとも呼ぶべき現象の契機となった団体であり、以下に紹介する『福岡日日新聞』の記事などによって活動の実態をある程度把握することができる (13)。

幻住庵の敷地内に所在する虚白院は、かつて仙厓が聖福寺住持を退いた後、隠棲して書画三昧の生活を送った庵室として知られている。仙厓在世時は、書画の揮毫を求める人で賑わい、虚白院の周りには市場ができるほどであった、という逸話も伝わるほどである。だが、仙厓の没後は次第に荒廃したらしく、明治期には「聖福寺境内東隅に形ばかり残れる」(14) といった有様であったらしい。

その後、地元の有志らによって再興が企てられるものの実現には至らず、近代日本画家の冨田溪仙（1879 ～ 1936）が 1919 年（大正 8）11 月頃に訪ねた際、虚白院は書生の棲家となっており、「院は恁うして朽ち果てゝ終ふであらうか、と思へば涙が出る」(15) と感想を漏らしている。

こうした事態が大きく展開するのが、1924 年（大正 13）、仙厓が 88 歳で遷化した 1837 年（天保 8）から 88 年目の節目にあたる年であった。この年、韜光玄譲を願主、冨田溪仙を発起人として仙厓和尚遺蹟保存会が組織され、虚白院の再興ならびに仙厓作品の蒐集保存等が目指された (16)。同会事業の経費は全て同好有志の喜捨によるもので、寄進者には記念として溪仙による揮毫作品が贈呈されたという。現在、福岡市博物館に所蔵される冨田溪仙筆《寿老人・宝船・蓬莱山図》はその一例である（図 9）。

その後の保存会の活動は『福岡日日新聞』の記事に詳しく（別表）、それによれば、喜捨金の募集は順調に進み、同年 7 月 24 日には虚白院再建のための敷地地上工事が終了し、地鎮祭が執り行われた（図 10）。

ところで、この時の虚白院再興事業は、既存の虚白院を移転改築し、その跡地に別の庵室（虚白院眞殿）を新築するものであった。そして、この移転改築は遅くとも 1925 年（大正 14） 1 月 20 日には完了していたようである (17)。

以上より、朝雲が制作した仙厓像および羅漢像の開眼供養は、仙厓を顕彰する機運が盛り上がっていた最中の出来事であったことが了解されよう。なお、新聞記事による限り、仙厓和尚遺蹟保存会の活動を主導したのは冨田溪仙であったことは疑いなく、山崎朝雲が同会にどのように関与したのかは明らかではない。

朝雲と保存会の関わりを示す事績としては、新庵室（虚白院眞殿）の築造が完了して間もない 1925 年 12 月 24 日頃、在京の福岡出身名士らによって仙厓遺跡保存会後援会が結成されていることをあげることができる (18)。

東京を活動拠点としていた朝雲も同会の幹事に名を連ねており、会の結成に先立って、在京の有志に引き合わせて欲しい旨、保存会願主の韜光玄譲から依頼されている (19)。これを踏まえるならば、山崎朝雲が保存会の活動に果たした役割はそれなりに大きなものがあり、特に在京の会員獲得に向けた働きかけを行っていたことが想像される。

図９　冨田溪仙筆《寿老人・宝船・蓬莱山図》福岡市博物館蔵

図 10　虚白院再興建築地鎮祭の様子（幻住庵蔵）

おわりに　仙厓和尚遺蹟保存会から仙厓三昧会へ

仙厓和尚遺蹟保存会は、堂宇再建事業が一段落した大正末を境に、徐々に活動が記録に現れなくなる。それと入れ替わるように活発な活動を展開し始めるのが仙厓三昧会である[20]。両会の関係は判然としないものの、どちらも福岡日日新聞社の後援事業であること、構成員が共通していることなどから察するに、保存会が発展解消し、三昧会へ引き継がれたと想像される。

もっとも、この推定を裏付けるだけの資料は今のところ見いだせておらず、特に仙厓三昧会の活動を巡ってはさらなる調査を必要とする。仙厓三昧会の活動で特筆すべきは、仙厓の百年遠忌を翌年に控えた 1935 年（昭和 10）に開催され、250 点近くの仙厓の書画や遺愛品、自作の塑像などが展示された仙厓和尚遺墨展覧会である。

既述の通り、山崎朝雲は同展に本作を出品しており、朝雲が三昧会の活動にも積極的に関与したことは疑いない。同会の活動を明らかにすることは朝雲をはじめとする福博の文化人たちがどのように仙厓を顕彰していたのかを考える上で有益な視座をもたらすことが予想される。論じ残した課題が多いことを自覚しつつ、ひとまずこの拙文を終えたい。

付記

画像の掲載については、各ご所蔵者様より格別のご配慮を賜りました。また、虚白院の再建事業をめぐっては幻住庵ご住職・山根玄眞様より種々ご教示頂きました。記して御礼申し上げます。

＜註＞

（1）辻惟雄「近世禅僧の絵画－白隠・仙厓を中心に」『日本美術全集 23　江戸の宗教美術』学研、1979 年
中山喜一朗「仙厓の生涯と作品―「厓画無法」の成立と展開―」『仙厓展』福岡市美術館、1986 年

（2）前掲註 1 中山論文

（3）中山喜一朗「印章研究」『福岡市美術館叢書 2　仙厓－その生涯と芸術』福岡市美術館、1992 年

（4）「真珠酬恩両庵歴代世次」『増補龍宝山大徳禅寺世譜付索引』思文閣出版、1979 年

（5）ただし、本作が山崎朝雲の手を離れた時期は不明。

（6）冨永朝堂「師山崎朝雲と私」『山崎朝雲展』福岡市美術館、1982 年

（7）山崎朝雲宛の書簡を集成した『福岡市美術館叢書 1　山崎朝雲資料集』（田鍋隆男編）によると韜光玄譲からの書簡でもっとも古い日付を持つのは、1918 年（大正 7）5 月 16 日（資料番号 381）である。

（8）聖福寺の山門は 1867 年（慶応 3）に焼失し、楼上に安置されていた十八羅漢像も灰燼に帰した（『聖福寺通史』聖福寺、1995 年）。その後、聖福寺第 128 世住職であった東瀛自関によって復興が企てられ、山門は 1911 年（明治 44）に再建された（『岩崎建設百年史』岩崎建設株式会社、1967 年）。安置する羅漢像の制作は福岡を代表する仏師で、山崎朝雲の福岡時代の師であった高田又四（1847 ～ 1915）に依頼され、2 体の羅漢像を 1912 年（大正元）に完成させた（『聖福寺通史』）。しかし、その後 1915 年（大正 4）に又四郎が亡くなったため、その制作を朝雲が引継ぎ、1916 年（大正 5）～ 1924 年（同 13）にかけて、残りの 16 体の羅漢を完成させた。本羅漢像の制作の契機となったのは、前述した朝雲の帰福であり、羅漢像と合わせて仙厓像の制作も依頼されたという。なお、点眼安座式が行われたのは、1924 年 11 月 23 日である（『福岡日日新聞』1924 年（大正 13）11 月 23 日）

（9）「仙厓像開眼式」（『福岡日日新聞』1924 年（大正 13）11 月 29 日）によると、幻住庵に 1918 年（大正 7）より安置された山崎朝雲作《仙厓和尚像》の開眼式が 1924（大正 13）年 11 月 28 日に行われたという。

（10）「大正 7 年 5 月 16 日　封書 381」田鍋隆男編『福岡市美術館叢書 1　山崎朝雲資料集』、1987 年

（11）前掲註 9 書所収「大正 13 年 10 月 19 日　封書 387」

（12）前掲註 9 書所収「大正 13 年 10 月 19 日　封書 387」

（13）以下に引用する『福岡日日新聞』の記事の捜索にあたっては田鍋隆男氏（福岡市博物館元学芸課長）よりご教示を得た。

（14）「虚白院再興」（『福岡日日新聞』明治 36 年 7 月 15 日）

（15）冨田溪仙「虚白院」同編『仙厓禅師遺墨集　上巻』1920 年。同書は国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧可能。

（16）「仙厓和尚遺蹟虚白院の再建」（『福岡日日新聞』1924 年（大正 13）5 月 24 日）。同紙によると保存会は、韜光玄譲、冨田溪仙の他、顧問の聖福寺住職龍淵謙道、世話人の遠藤甚蔵、下澤善右衛門、深見平次郎、岩崎基次郎、村上榮吉、奥村利助らから成るという。

（17）「仙崖（ママ）和尚隠棲所虚白院の改築」（『福岡日日新聞』1925 年（大正 14）1 月 20 日）。『岩崎建設百年史』（岩崎建設株式会社、1967 年）によれば、虚白院眞殿の竣工日は 1925 年 10 月 31 日である。なお、幻住庵住職、山根玄眞氏への聞き取りによれば、虚白院は元々、現在地よりも西側に所在しており、上述の庵室新築に伴って移築された。その後、1970 年前後に再度移築され、現在の状態になったという。

（18）「仙厓遺蹟保存を賛して東京に後援会起こさる」（『福岡日日新聞』1925 年（大正 14）12 月 24 日）

（19）前掲註 9 書所収「大正 13 年 10 月 24 日　封書 388」

（20）三昧会の活動を巡っては拙論（「小西コレクション－コレクションの概要とその意義－」『仙厓－小西コレクション』2019 年、福岡市美術館）を参照されたい。

関連年表

事績の記述に際しては、福岡日日新聞の記事のほか、以下の文献を参照した。

・冨田溪仙編『仙厓禅師遺墨集　上巻』、1920年　※同書は国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧可能。

・『岩崎建設百年史』岩崎建設株式会社、1967年

・田鍋隆男編『福岡市美術館叢書1　山崎朝雲資料集』、1987年　※出典には朝雲資料●と記載。

・『聖福寺通史』聖福寺、1995年

西暦	和暦	月日	事項	出典
1866	慶応2	1月8日	聖福寺山門、火災により焼失。	『聖福寺通史』
1903	明治36	7月15日	博多の有志によって、虚白院の再興が企画される。	福岡日日新聞、明治36年7月15日
1911	明治44	11月30日	聖福寺山門、再建される。	『岩崎建設百年史』
1916	大正5	8月	山崎朝雲、肺炎の療養のため福岡へ帰郷。聖福寺の東瀛老師のもとに寄寓する。	朝雲資料201
		この年	東瀛自関の依頼をうけ、聖福寺山門内の十六羅漢像制作に着手。	福岡日日新聞、大正13年11月23日
1918	大正7	5月16日	この頃、山崎朝雲、仙厓像を制作し幻住庵に安置する。	朝雲資料381
1919	大正8	11月	冨田溪仙が幻住庵を訪問。荒廃した虚白院の現状を嘆く。	冨田溪仙編『仙厓禅師遺墨集　上巻』
1921	大正10	6月15日	この頃、仙厓像を安置する厨子が完成。	朝雲資料385
1924	大正13	4月頃	韜光玄譲を願主、冨田溪仙を発起人として仙厓和尚遺蹟保存会が組織される。	福岡日日新聞、大正13年5月24日
1924	大正13	6月9日	虚白院再興事業を櫛田宮世話人諸氏が賛助することとなり協議を行った。	福岡日日新聞、大正13年6月11日
1924	大正13	6月10日	韜光玄譲、冨田溪仙ら京都周辺の寺院を訪れ虚白院建築様式の参考とするため、博多を発つ。	福岡日日新聞、大正13年6月11日
1924	大正13	7月18日	喜捨金の募集が順調に進んでいるため、冨田溪仙、京都の大工の中西父子を伴い帰省。世話人と共に建築設計などの打ち合わせを行う。	福岡日日新聞、大正13年7月18日
1924	大正13	7月24日	虚白院再建のための敷地地上工事が終了し、地鎮祭を執行する。	福岡日日新聞、大正13年7月24日
1924	大正13	10月19日	山門の羅漢像の開眼式にあわせて、仙厓像の献鉢式を行う旨、韜光玄譲から山崎朝雲へ通知。	朝雲資料387
1924	大正13	10月24日	東京の有志者へ仙厓堂建立に賛助を請うために上京する。その際、知己に引き合わせて欲しい旨、韜光玄譲から山崎朝雲へ依頼。	朝雲資料388
1924	大正13	11月	山崎朝雲、来福。《寒山拾得図》を含む、仙厓作品を韜光玄譲のもとへ持ち込み、箱書を依頼。	《寒山拾得図》箱蓋裏墨書
1924	大正13	11月23日	聖福寺山門の羅漢像完成。安座式が挙行される。	福岡日日新聞、大正13年11月23日
1924	大正13	11月28日	幻住庵に安置される山崎朝雲作の仙厓和尚像の開眼式が挙行される。	福岡日日新聞、大正13年11月29日
1925	大正14	1月20日	冨田溪仙による記念画の第1回頒布を行う。虚白院の移転改築は既に終わり、その跡地に新築すべき庵室工事も順調に運んでいる。	福岡日日新聞、大正14年1月20日
1925	大正14	10月31日	虚白院眞殿が竣工。	『岩崎建設百年史』
1925	大正14	11月15日	虚白院附属茶弓一庵が竣工。披露のため茶菓の饗応をなす。	福岡日日新聞、大正14年11月15日
1925	大正14	11月15日	弓一庵の完成につき、保存会関係者および、市内外の茶道同好者を招待し、茶室開きを開催。	福岡日日新聞、大正14年11月17日
1925	大正14	12月24日	仙厓和尚遺蹟保存会の後援会が東京で組織される。	福岡日日新聞、大正14年12月24日

「富野由悠季の世界」展
企画の実際―アニメーション企画展の一事例として

山口洋三

はじめに―「富野由悠季の世界」展を終えて

この数十年の美術状況の移り変わりの中で、美術とサブカルチャー（ここでは漫画、アニメーション、特撮映画など、大衆文化のうち、視覚的要素が大きく、商業ベースで制作されている作品群を指す、以下同様）は急速に接近し、数多く展覧会が開催されるまでになった。

福岡市美術館では、1991 年に「手塚治虫展」を開催して以来、数は多くはないが、サブカルチャーの展覧会をいくつか開催してきた。

筆者自身は、サブカルチャーの専門家を自任しているわけではないものの、強い関心を持っており、過去に「成田亨　美術／特撮／怪獣」（2014-15 年　富山県立近代美術館、福岡市美術館、青森県立美術館）の共同企画に参画し、「ゴジラ展」（2016-17 年 福岡市美術館、北海道立近代美術館、名古屋市博物館）の巡回を担当し、2019 年には「富野由悠季の世界」展（以後、「富野展」と略記）を共同企画するなど、特撮とアニメの展覧会企画に立て続けにかかわってきた。

この「富野展」は、兵庫県立美術館学芸員の小林公・岡本弘毅、島根県立石見美術館学芸員の川西由里、静岡県立美術館学芸員（当時）の村上敬、富山県美術館学芸員（当時）の若松基、そして青森県立美術館学芸員の工藤健志との共同企画であり、企画 6 館のほか、巡回途中に 2 館（新潟市新津美術館、北海道立近代美術館）での追加開催が決まり、2022 年 1 月までに合計 8 館を巡回して終了した。

「富野展」の企画案は、同展企画チームメンバーの 1 人である工藤から出たものであったが、『機動戦士ガンダム』などの総監督を務めてアニメの概念を変え、現在もカリスマ的人気を誇る富野由悠季（1941 年生まれ）の作品に焦点を当てた展覧会となれば、たとえ自分自身がアニメの専門家ではなくとも、蛮勇をふるって企画を進めたい、と思った。その時の筆者自身の思いは、ロボットの登場するアニメの監督としてだけではなく、映像を用いて優れた表現を行う表現者として富野を正当に評価し、そしてその実力とメッセージを多くの人に知らせたい、というものだった。彼は、メカニックやキャラクターにリアリティを与える未来世界や異世界を舞台に設定し、これまで常識とされてきた勧善懲悪的ストーリーを退けてシリアスな人間ドラマを描いた。そして、声優、音楽の選定から、主題歌の作詞なども自ら行い、自らの描く世界を構築してきた。こうした多彩な仕事内容は、アニメ界においては知られたことではあったが、アニメ界の外ではあまり知られてはいない。しかし彼の表現や思考は、アニメの枠を超えて影響力を及ぼしており、もっと注目・評価されるべきであろう。このことは、「富野展」図録にも記した[(1)]。

日本の商業アニメーションの監督の回顧展の他の例としては、「富野展」とほぼ時を同じくして開催された「高畑勲展　日本のアニメーションに遺したもの」（2019 年　東京国立近代美術館他）があるが、これらより前の時期には 2010 年の「押井守と映像の魔術師たち」（八王子市夢美術館）がある程度で、事例があまり見当たらない。また美術館学芸員だけで一から企画したサブカルチャーの展覧会の事例もさほど多いわけではない。それゆえであろうか、「富野展」に関する取材では、本展の成り立ちについて尋ねられることがしばしばあった[(2)]。

現状のサブカルチャー展の多くは、サブカルチャー作品の制作者側と大手メディアとが組んで企画を立ち上

げ、複数の会場を巡回する。その際、美術館側は、少ない出資でほぼ名義的に当該展覧会の巡回展の実行委員会に名前を連ねて実質会場を提供するのみだったり、あるいは有料で会場を貸し出すだけだったりする場合が多い[3]。サブカルチャー展は数多く開催され、内容にも目を見張るものがあり、多くの観客を集めているにもかかわらず、美術館側からは「鬼子」扱いされているような現状がある[4]。サブカルチャーに特に興味を持たない美術関係者から見れば、「富野展」もまた、上記のようなサブカルチャー展の1つとして見られがちだったかもしれない。

では、あまたあるサブカルチャー展と「富野展」とを分けるものは何か？　それは、「我々は、富野を優れた1人の表現者として見続けた」ということに尽きる。その理由は先述した通りである。それゆえ、我々は冷静で客観的な態度を彼に向け続け、ファン的な視線やマニアックな興味のみに依拠して仕事することを極力控えた。

企画にあたり、本来「映像」である「アニメーション」をどう展示という形式に落とし込むのか、その中で富野由悠季という1人の表現者の創作意図や演出上の工夫をどう伝えるか、といった課題については、資料の調査結果をもとにしながら企画チーム内で何度も議論を重ねてきた。そもそも「富野展」開催自体を富野本人が何度も拒否してきた経緯がある。また自前のファンサイトを作って富野の発言をフォローしたり、独自の研究を発表したりしている熱心な富野ファンも少なくない。だから、この展覧会はそうした長年の富野ファン、アニメ関係者、アニメにはそもそも興味を持たない美術関係者はもちろんのこと、富野本人を納得させる内容にしなければならない―これが企画チームに課せられた重い課題であった。ではその成果はどうであったか？

幸いにも「富野展」は2019年美連協大賞優秀カタログ賞、および日本アニメーション学会賞2020特別賞を（先述の「高畑勲展」とともに）受賞した。また富野自身も「富野展」についてのインタビューの中で、会場ごとに展示の見え方が変わることに驚き、展覧会の意義を肯定的に述べている[5]。そして、これまでの功績が認められ、富野は令和3年度の文化功労者に選出された。この選出に「富野展」が貢献したのかどうかは明確ではないが、賞候補となるにあたっての参考程度にはなったと信じたい。

本論では、これまで概略的にしか書いたり、語ったりしなかった「富野展」の発案から実現までを少し詳しく時系列的に書き記すことにしたい。その上で、「富野展」の展示における特質について触れておこうと思う。

1．成り立ち

「富野展」は、前述の通り青森県立美術館の工藤の発案によるものである。筆者は、工藤とともに「成田亨―美術／特撮／怪獣」を企画開催したが、終了後に次の企画展のアイデアについて話す中で、彼が「富野監督の展覧会ができないか」と話した。それを聞いた筆者は「飾るものがないのでは」と反応するほかない、という状態であり、その折には具体的なアイデアや展覧会イメージは両者とも全く持ってはいなかった。そのような中で、我々が富野に出会う機会が意外に早く訪れた。2015年11月1日、「村上隆の五百羅漢図展」（森美術館、東京）のイベントとして、村上と富野が対談するトークセッション「日本、物語、リアリズム」が開催された。工藤と筆者はこのイベントにカイカイキキより誘われ、そろって聴講した。終了後の茶話会に村上から誘われた我々2人は、ここで初めて富野と出会い、直接話をする機会を得た。工藤から「富野展」の話を富野に伝えたが、その時の彼の反応は否定的であった。「演出を展示で示すことはできない。飾るものなどないからやめた方がいい」、というのが彼の回答であった。

次の動きは、これから1年以上が過ぎた2017年2月である。筆者が富野宛に手紙を出している（2月28日付）。「村上隆展の折に展覧会の話をしているが、よろしければ本件を進めたい」、「富野監督を一表現者として、その制作思想と作品のつながりについて、実作品、原資料を通して正当に評価する道筋をつけたい。また美術館が積極的にこの分野に取り組むことにより、美術に比肩する視覚芸術としてのアニメの評価と顕彰の方法論の提案を

試みたい」と、「富野展」における当方側の基本姿勢を述べた。その後何度かの手紙、ファックスでのやりとり、直接の訪問による交渉などを経ている。

また同時に、共同企画または巡回する美術館を探す努力も続けていた。同年の6月27日、富野が監督した多くのアニメ作品を制作する株式会社サンライズを初めて訪問した。この時、工藤、筆者のほかに、兵庫県立美術館の小林、静岡県立美術館の村上も同行している。直後に、島根県立石見美術館の川西より参加の連絡があり、また富山県美術館の若松からも巡回参加の連絡を受けた。2017年の秋までには6館の開催が決まり、メディアとして在京の大手新聞社に相談し、サンライズとの交渉の席にも着いてもらっていたが、2018年3月に辞退の連絡があり、代わって兵庫県立美術館の紹介で神戸新聞社が入ることになった。この間、工藤と筆者で企画書の制作、更新を何度か行った。

ところで、なぜこの6館になったのか？　なぜ東京での開催がないのかについては、今もしばしばツイッターなどの書き込みに見られるため、改めてここで書いておこう。

まず福岡市美術館を含む6館所属のそれぞれの学芸員が、アニメを含むサブカルチャーの企画展開催の経験を持っており、また富野由悠季監督作品についても造詣が深かった、ということが最も大きな理由である。島根の川西、青森の工藤、静岡の村上は「トリメガ研究所」というユニットを組んでユニークな企画展を開催してきた。「ロボットと美術　機械×身体のビジュアルイメージ」（2010-11年）、「美少女の美術史」（2014-15年）、そして「めがねと旅する美術展」（2018-19年）といった、美術だけでなくアニメ、漫画などのサブカルチャーにまで視野を広げて近世～現代の視覚表現を問いかける展覧会を企画してきていた。

富山県美術館は、青森、福岡とともに「成田亨　美術／特撮／怪獣」を企画開催した。2014-15年のことである。そもそも「成田展」の発案は富山からであった。同館（のち富山県水墨美術館）の若松の富野ファン歴は企画メンバー中最も長い。

兵庫県立美術館の小林と岡本は、2013年に「超・大河原邦男展　レジェンド・オブ・メカデザイン」を企画開催した。大河原は、富野とも長く仕事を共にしたメカニックデザイナーである。彼らは「Oh！マツリ☆ゴト　昭和・平成のヒーロー＆ピーポー」（2019年）も企画中であった。昭和～平成の時代を「ヒーロー」と「大衆（ピーポー）」という視点から、やはりサブカルチャーにまで領域を広げて浮かび上がらせた内容である（「富野展」と準備期間が相当かぶっていた）。

そのほか、東京など複数の都市の美術館への巡回打診を筆者から行ったが受け入れには至らなかった。それゆえ東京開催が実現しなかった。

こうして6館が集まったので、2018年2月に「これほどの美術館が開催に賛同していることの重さをわかってほしい」と富野に訴え、ようやく展覧会開催の許諾を得た。この時、我々は何か方法論を持っていたわけではないが、最初の手紙に書いた「1人の表現者として評価したい」という熱意に富野、サンライズが折れる形で企画が進行し始めた。

これに先立って、企画チームの7学芸員は、2018年1月9日～10日、福岡市美術館の仮事務所（リニューアル工事中であったため、美術館に近い旧舞鶴中学校校舎を仮事務所としていた）に集まり、第1回目の会合を行い、展覧会の基本方針、そして各員の分担について話し合った。このときに、富野が総監督を務めたアニメタイトルを全員で分担して担当し、分析調査を進めることも方針として決定した。結果、1人につき2～4タイトルを担当することになった。全体を通すテーマまでは確定してはいない。

今振り返れば、チームで進めるにあたり、1つのアニメタイトルを1人の学芸員に割り振る、というやり方は良い結果を生んだ。これは後述したい。

2. 資料調査

「富野展」の調査対象となる作品、資料の所蔵先の大口はサンライズと富野自身である。他に、富野が駆け出しのころに所属した虫プロダクションの資料を管理する手塚プロダクション、富野の初監督したアニメの制作会社である東北新社、クリエーター各氏などがあるが全体の分量としては前２者が圧倒的である。

まず富野が供出した資料は、全体で段ボール箱 14 箱分あった。展覧会の開催を許諾した富野は、所蔵する資料の供出を決め、すぐに我々の側に輸送するように指示があった。そこで 2018 年 5 月 29 日にそれらを富野宅から搬出し、兵庫県立美術館に搬入した。当時福岡市美術館はリニューアル工事中で搬入場所がなかったためでもあったが、他 5 館からのアクセスを考えてのことでもあった。

これらの調査は、2018 年 7 月と 8 月、それぞれ 3-4 日間かけて行った。全資料を撮影することを優先し、中身の精査は画像を元に行うこととした。膨大な数であるため、資料の詳細を確認する時間がなかったためである。

これと並行するかたちで、サンライズ資料課でも同様の調査を行った。こちらはアニメ作品ごとに日程を分散させた。その日程に合わせ、こちらが希望したアニメ作品の資料を出してもらい、当該アニメ作品の担当者が調査者の中心となった。同社資料課からは、あらかじめ所蔵する資料のリスト、セル画や絵コンテの画像のリストを提供してもらっていたため、調査対象資料を絞り込む際に役に立った。ただ、時間の都合もあり、画像がわからない（実際に見ないとわからない）資料の調査を優先した。この調査は 5 月と 8 月の 2 度、やはり 3-4 日かけて行った。また、手塚プロダクション、東北新社の調査も同時期に行っている。

さてここで調査した資料を分類すれば以下のようになる。

①企画書（富野が書いたものも多数）　②キャラクター／メカニックなどのデザイン画、設定資料
③絵コンテ（主に富野が描いたもの）　④原画、動画、修正動画　⑤セル画
⑥イラストレーション　⑦録音台本　⑧富野が描いたアイデアスケッチ、撮影した写真など
⑨富野が所持している、①～⑧に分類できない資料
⑩画像データのみの資料　⑪番組、映画宣伝ポスター

これらは、いずれもアニメの制作過程で作られるものであり、近年は中間制作物と呼ばれるが、映像が完成してしまえば基本的には「不要」となるため、失われているものもある。特に④、⑤は膨大な数に上るため、残存率はあまり高くはない。また映像の設計図である③は、今回の展覧会では重要となる資料であるが、これもすべてそろっているわけではなかった（まさかテレビ放映、劇場公開から数十年後に美術館で展示されることになろうとは、どのスタッフも予想しなかっただろう…）。

普段から「オリジナル」（つまり作家の直筆の絵画か、限定的に複数作られた版画など）に接している我々にとり、上記に示した資料類はその概念の変更を迫られるものであった。①、②、③には直筆とコピーが存在し、コピーの上に富野が鉛筆などでメモ書きしたり、書き直したりしたものがある。また直筆が存在せずコピーのみが保管されている場合もある。②には、富野がデザイン変更指示を書き込んだものが少なからず存在し、この展覧会においては、それは完成したデザイン原画よりも貴重である。⑧はアニメ作品の構想を思わせるスケッチ、ロケハン写真を含み、⑨は少年期から学生時代に描いた作品や彼の父親にちなんだ資料である。

資料の形態も様々であった。1 枚 1 枚数えられるものから、冊子状のものまである。例えば、映像の設計図であり、演出のかなめである③の「絵コンテ」についていえば、テレビアニメ 1 話分（約 25 分）で 120-130 枚程度あり、劇場版（90-120 分）アニメとなれば約 800-1000 枚に上る。さらに⑩はまさにオリジナル不在のまま画像のみが現存し、逆に比較的最近制作されたものゆえ、最初からデジタル画像や文書データとしてのみ存在するものまである。これらも含めればおそらく 1 万点以上の資料を我々は調査したことになるのではないだろうか。

東京での調査に合わせて、富野本人へのインタビューも行った。企画チームの学芸員は全員が地方都市在住、

しかも全員が別の企画展の準備・巡回業務をかかえていたため、日程調整は困難を極めた。それでも、富野へのインタビューの際には全員が参加し、貴重な話を伺うことができた。サンライズなどでの資料調査の合間で、都合３～４回のインタビューを行った。富野自身が所蔵している資料写真を基に、その詳細を聞き取った。その話は、アニメ作品制作の舞台裏、その背後にある自身の意図、当時の状況、現在の考えなど話は広範にわたり、聞き手の我々を飽きさせることがなかった。彼の少年期に描いた絵、富野の父親が太平洋戦争中に開発研究に関わっていたという与圧服（航空機パイロットが、気圧の低い高高度でも生命を維持するために着用するための装備）の写真や資料についての話は、彼の創作の原点と言え、貴重であった。

３．展示構成案の作成

調査の成果、インタビューの内容を元に展示構成案を作っていった。

課題は「概念の展示」をどう実現するか、である。これは図録および展覧会冒頭にも、富野自身の言葉「『概念の展示』は不可能なのだが……」として掲げられた。つまり、「演出」をどう展示化するか、という富野からの問いかけである。

例えば宮崎駿や安彦良和のように卓抜した技量で絵が描ける監督であれば、彼らの絵をベースとした展覧会がまず考えられよう。しかし、富野は（技量的に優れた）絵は描かない。実際には大量の絵コンテや、デザイナーに指示するための下案を描くが、その絵自体がアニメに登場することはない。そして、アニメの構想はすべて文字で書かれる。富野が当初「飾るものがない」というのは実はこの点を指していた。アニメ制作時の構想メモ、企画書、うまくはない絵で描かれた絵コンテ、デザインの下案などで、果たして展覧会は成り立つのか。富野が展覧会をなかなか受諾しなかった理由はそこにあったのだ

だが、絵を描かない監督だからこそ、表現者の思考、そして制作の過程を示しているそういった資料が重要なのであり、我々にとり展示に値するものであった。調査対象資料の中に、富野自身が書いたメモや修正指示などが大量にあったことがこの時点で分かっていたし、そもそも企画書執筆の段階で、展示資料の展示の仕方（資料の組み合わせ方、映像との関係性など）と、そこに付す解説の内容がカギとなることも予想できていた（これは、後述するように実際にその通りとなった）。アニメ作品に込めた富野の表現の方法をどう観客に伝えるか、という１点に取り組めば、「概念の展示」という課題も自ずと達成される、という、チーム内の（暗黙の）合意と確信が、各員の内部にあったことだろう。その確信の裏には、我々学芸員のこれまで培ってきた知識や経験、そして展示技術があったことは言うまでもない。

構成案作成はメンバー間でのメールのやり取りにより、テキストのたたき台に各々が書き込む形で進められた。やり取りが進むうちに「章」が多くなりすぎたため、その上に「部」を設け、全体を６部構成とし、その下に「章」、さらにその下に「節」がぶら下がる構成が固まっていった。またその過程で、『機動戦士ガンダム』、『伝説巨神イデオン』、『∀ガンダム』、『Gのレコンギスタ』の４作品は他の作品よりも大きく扱い「章」として取り上げることとし、他のアニメ作品は章のテーマの中の「節」に位置づけることが固まっていった。

結果、以下のように大テーマを設定し、各部のテーマを設けてアニメ作品を割り振った。

①大テーマ：旅立ちと帰還、対立と和解、生と死、破滅と再生

②各部に設けたテーマは以下の通り：

第１部　宇宙へあこがれて（少年期～虫プロ、フリー時代、『海のトリトン』、『勇者ライディーン』、『無敵超人ザンボット３』）

第２部　人は変わっていくのか？（『機動戦士ガンダム』、『伝説巨神イデオン』）

第３部　空と大地の間で逞しく（『無敵鋼人ダイターン３』、『戦闘メカ ザブングル』、『OVERMAN キングゲイ

ナー』、『闇夜の時代劇　正体を見る』、『ラ・セーヌの星』、『しあわせの王子』）

第 4 部　魂の安息の地は何処に？（『聖戦士ダンバイン』、『ガーゼィの翼』、『リーンの翼』、『重戦機エルガイム』）

第 5 部　刻の涙、流れゆくその先へ（『機動戦士 Z ガンダム』、『機動戦士ガンダム ZZ』、『機動戦士ガンダム逆襲のシャア』、『機動戦士ガンダム F91』、『機動戦士 V ガンダム』、『ブレンパワード』）

第 6 部　大地への帰還（『∀ガンダム』、『G のレコンギスタ』）

宇宙にあこがれた少年が、様々な冒険、経験をへて、やがて大地（地球）に帰還する、という流れを想定した。これは富野自身の興味、対象や思想の遍歴にも重なるし、また初期の彼のアニメが宇宙を舞台としていたのに対し、近年の作品では宇宙時代における大地（地球）の重要さ、かけがえのなさを説いているため、観覧者にとっても納得のいく内容であろうと思われた。

こうする中で、各員の展示イメージも朧げに出てきていたので、テキストベースの展示構成案を要素のみ抜き出してエクセルの表にまとめ直し、これを元に章・節の展示内容と、図録や展示パネルでのテキストとなる内容を大まかに決めていった。展示資料だけでは説明がしにくい富野の思想的部分や、各アニメの見どころ、世界観などについてのコラムの文章（トミノロジーと命名）も付すことも固めていった。

ここまでは、文字のみの展示構成案にであったため、次にパワーポイントを用いて先述のエクセルの展示要素表を図にしてみる作業を行った。実は、この時点においても、我々は調査資料のリストを作っていたわけではなかった。それゆえ、展示構成案に沿って、調査写真から各章・節で展示すべき資料を選び出し、それをパワーポイントに張り付けることによって、展示資料、展示映像などを具体化していき、同時に出品リストを作成し、借用者に貸出依頼を行った。このパワーポイント資料は合計 88 頁の冊子となったが、サンライズや富野への展示案の提示や、特に福岡展実行委員会内部でのイメージ共有に役立った。

さて出品点数 3000 点と公称してきた「富野展」の正式な出品点数の正確な数字は今もって算出できていない。数字はあらかじめ決めたものではなく、結果としてこのようになったものである。ただ、ある程度の数量による縛りがなければ、企画チームメンバー各員が担当アニメの出品作品リストを固めることができないため、おおむね以下のようにした。

全体を 1000 点程度と想定。これは「成田亨　美術／特撮／怪獣」や、「ゴジラ展―大怪獣　創造の軌跡」での出品点数を想定したものだ。前者が 700 点、後者で 800 点ほどであったため、これよりも多い点数を想定した。ただし、富野作品の総数はテレビアニメ、劇場版、短編など合わせて 30 タイトルほどになるため、1000 点を全体総数とした場合、単純計算で 1 作品につき約 30 点の資料数になる。ここから、章で扱うアニメ作品＝ 100 点、節で扱う作品＝ 25 点という大まかな数字を算出した。ただし冊子の資料は飾り方次第では 1 点として勘定し、またパネル化する画像データについては特に制限を設けなかった。本展では画像データは実資料の補足ではなく、それと並ぶ重要資料として取り扱ったため、展示資料数は膨大なものとなった。ここには、1 作品を 1 学芸員が担当することの特徴も出ている。全体としてみれば確かに膨大になってしまったが、1 つのアニメ作品について富野の演出意図や作品テーマ、見所などをきちんと伝えようとすれば 25 点どころか 100 点でも足りないのだ。それがわかる故、全体統括の筆者も、数量規制はあくまで目安として扱い、現場の展示作業にて対処することとした。また、「インターミッション」として、富野執筆の小説、楽曲の作詞を紹介するコーナーも設けることとした。

4．現代美術作家の起用

3 章の展示構成案作成と同時に、現代美術作家の起用と作品の発注も行った。そもそも、チーム内では、アニメの中間制作物ばかりが並ぶ展示が単調になることを懸念して、アイキャッチとなるような、そして富野展全体の象徴ともなるような、立体や映像インスタレーションの展示は早くから検討されており、その役割を現代美

術作家に依頼することとした。工藤から、立体制作担当の候補作家として青秀祐（1981 年生まれ）が、映像インスタレーション制作担当として八嶋有司（1981 年生まれ）の推薦があった。

青には、富野が幼少期から親しんでいたという戦時中の「与圧服」の写真を元にした与圧服の立体の制作を委託した。この制作に際しては、青は実際に富野に会って詳細を取材。富野や企画チームから参考となる資料を青に提示し、立体と写真との組み合わせからなる、《与圧服―富野喜平氏撮影の研究記録による―I 造形の考察と立体再現》、《与圧服―富野喜平氏撮影の研究記録による―II 色彩の考察と平面再現》として完成した（口絵２）。これらは、第１部第１章にて、富野の少年期の作品や宇宙旅行関係資料とともに展示された。与圧服関係の資料は、富野にとり、自分の宇宙への興味を掻き立てた原点となるものであっただけに、青の作品は、「富野展」を象徴するアイキャッチとして機能した。

一方、八嶋有司には、映像作品での参加をお願いした。彼は空間全体を用いた迫力ある映像インスタレーション作品を制作する映像作家である。彼が過去に制作した《The Dive – Methods to trace a city》（2015 年）の映像の展示形式に、富野作品からの抜粋映像をはめ込み、あたかも観客が富野の歴代のアニメ映像に取り囲まれるような体験ができる映像インスタレーション《この世界を風景の―Dive》を制作した（口絵３）。この作品制作にあたっては、使用する映像の抜粋が必要であったが、これは筆者が以下のような 10 のテーマをチーム内で提案し、各学芸員が担当のアニメからそのテーマに合う場面を指定。八嶋がその部分の映像を編集した。

①世界観の説明シーン　②主人公が物語に入るシーン　③仮面をつけたキャラクターの登場、活躍シーン
④ロボット戦闘シーン　⑤爆発シーン　⑥登場人物が死ぬシーン　⑦キスシーン　⑧子供が活躍するシーン
⑨メカの合体・変形シーン　⑩主人公の帰還のシーン（主にクライマックスや最終回）

映像とともに流れる楽曲「海に陽に」（作詞：井荻麟（富野由悠季の別名）、作曲：すぎやまこういち、歌：水原明子　劇場版『伝説巨神イデオン 発動篇』イメージソング）も企画チーム側で選定し、八嶋はこの音楽に合わせて映像が切り替わるように制作した。こうして制作された映像は、6 台のプロジェクタで投射壁面と床面に、それぞれの映像が重なるように投射された。

元々、当初映像案として、企画チームの中で『∀ガンダム』の劇中に登場する「黒歴史」の場面を彷彿とさせるような、複数のスクリーンが中空に浮かんでいるようなインスタレーションが作れないか、と話題になったことがあったが、八嶋の制作したこのインスタレーションは、まさにそれを連想させるものとなった。

他に、表には出ない部分で企画チームのサポートを行ったのが、映像作家の泉山朗土（1974 年生まれ）である。前章の展示構成案で明らかになった、各章・節で展示する映像の部分的な切り出し、図録やパネルで使用する画像（場面写）の切り出し作業、そして講演会などの撮影、編集などを企画チームより依頼した。切り出した映像の総上映時間は約 4 時間 40 分、依頼した場面写の総数は約 780 枚に上った。

5．広報用キービジュアルの制作

2018 年 10 月ごろから話題になりだしたのが、広報用キービジュアルである。富野の代表作と言えば『機動戦士ガンダム』であるが、『ガンダム』を前面に使ってしまっては「ガンダム展」と勘違いされてしまう恐れもあるが、かといって多数のメカやキャラクターを使ってしまえば広報ターゲットがぼやけてしまう恐れもある。企画チーム内で、富野とかつて仕事をしてきたクリエーターの 1 人に描き起こしてもらう案が出て、候補数名を上げてサンライズに交渉をお願いしたものの、うまく進まなかった。結局、富野アニメに登場する主要なメカやキャラクターを集合させて、背景に富野の少年期の興味を示す与圧服の写真、彼が描いた宇宙船やロケットのイラストを配置したものをグラフィックデザイナーの植松久典がデザインした。植松は「富野展」のロゴ案もキービジュアルの前にデザインを済ませていた。このロゴとキービジュアルが、公式 HP や各会場のポスターなどで

使用された。

なお、植松は、そのまま図録のデザインにも起用された。彼はサンライズ制作のアニメ作品の題字デザイン、バンダイナムコアーツのブルーレイボックスのデザインなどをすでにいくつか手掛けており、アニメ関係のデザインの経験があり、また富野の作品世界にも明るかったため、仕事はスムーズに進んだ。

6．展示プラン

図録制作と展示プラン制作がほとんど同時進行となったため、図録の頁割がそのまま展示プランとなるように工夫した。ただし、本展は作品数が通常の美術展よりも多く、資料の形態が多岐にわたるので、覗きケースに入れるもの、額装するもの、パネル化するものを想定しながら作業を進めなければならない。

実資料の展示については、額装、各館所蔵の覗きケース、ウォールケースのほか、「ユニット」と我々が呼んだ、横幅 1800mm、縦 900mm、奥行 60mm（ケース内の奥行 13mm）の、木製箱型、アクリルカバー付きの壁掛け・床置きケースを作成（建築家・西澤徹夫による設計）。大きさのある程度そろった、互いに関連のある資料はこのユニットに、ＰＰ袋に入れて固定した。巡回、展示の手間の節約の為であったが、そもそも、こうしたアニメの資料は額装して見られることを考慮したものではないため、見た目にも大げさな感じがなく、鑑賞にはちょうどよい仕様の展示具となって重宝した。

ただ、額装にしろ、ユニット展示にしろ、あらかじめ数量を出しておかねばならないため、ここでもパワーポイントを使って各自担当のアニメ作品の展示プランを作成して額、ユニットの数を算出した。

画像データのみの展示の場合は、それを解説やキャプションとともにパネル化しなければならないが、この作業も上述の展示プラン作成と並行して、大まかなデザイン案をパワーポイントを使って学芸員各自で制作した。一見、これは学芸員がデザイン作業まで行っているように見えるが、こうすることで、パネルにおける文字の大きさ、分量や写真の大きさを学芸員が把握できるため、例えば図録から引用した文章をどの程度短くすればよいか、とか、逆に図録では不要であったが展示では解説を補うべき箇所などを理解でき、展示パネル発注の際に作業を効率よく行うことができた。

「富野展」では、通常の美術展よりもかなり長い解説文を、多数の箇所につけている。章解説は約 1000 字、節解説は約 800 字を目安としている。各資料につけた解説は大きさも文字数も様々である。これは近年の美術館における解説のつけ方とは逆行する。例えば福岡市美術館のコレクション展示では「100 字解説」を付している。つまり、解説類はなるだけ短く、一目で読める分量にして作品を見る際の邪魔にならない程度に鑑賞者の理解を深める方法が求められている。この流れは当然念頭に置きながらも、企画チームはあえてその方法は採らず、内容を伝えることを最優先とした。アニメ関係の中間制作物は、美術作品とは異なった情報の質・量を有している。どのような意図でその資料が存在し、そこにどのような情報が読み取れるかは、アニメの専門家や制作現場の人でなければわかりにくいことも多く、文字解説による導入が不可欠である。中でも特に我々が注意を払ったのが絵コンテの展示である。演出家・富野は、ほとんどのアニメ作品で絵コンテを自ら描き、映像の設計を行い、作画スタッフに対する細かい指示を書き込んでいる。富野の意図がこれほどわかりやすく出ている資料はないが、注意深く見ないとその読み込みは難しい。今回、企画チーム全員が自分の担当作品展示において絵コンテを展示し、解説を付し、その絵コンテのシーンに該当する映像箇所と対照させている。

この映像使用もまた本展の特徴の 1 つだ。アニメも映像作品であるから、いくら紙の資料を展示してみても、完成品である映像が何もないと、総監督の意図やアニメの内容を詳しく説明したところで説得力を持たないだろう。特に絵コンテと映像を対照するならなおさらにことである。幸い、サンライズの計らいでかなりの規模での映像展示が実現した。『しあわせの王子』、『機動戦士ガンダム』第 1 話、『闇夜の時代劇　正体を見る』は全編

を上映し、そのほかは数分から 20 分程度に編集した抜粋映像をコーナーごとに大小のモニタを使って常時上映した（兵庫や青森など、会場によってはプロジェクタを使って空間を活かした映像展示を行っている）。先述したように総上映時間は 4 時間を超えるものとなってしまったが、いずれの映像も、富野の演出意図を説明するために、絵コンテ、レイアウト、セル画といった資料と対照できるようにした。映像の中にもキャプションを入れて、映像の注目箇所に注意を促したりもしている。

絵コンテ、解説、映像展示の例としては『機動戦士ガンダム』（筆者担当）の展示がわかりやすい（図参照）。展示は右から左に流れる。富野が描いた絵コンテは、注目ポイントの解説とともにパネル化され、その隣に絵コンテと同じ場面を含む映像が流れる。さらに左に行けば、安彦良和が描いた同映像のレイアウトが展示されていて、富野の絵コンテから流麗な絵を興した安彦の技量を見ることができる。そして、その左には、絵の完成品としての「セル画」が 4 点額装で展示される。これら資料を順番に、あるいは同時に見ることで、鑑賞者は、映像だけを見ている時よりも一層深く富野の演出意図を理解できることだろう。この例のように、画像、文字解説、映像、実資料といった、異なった媒体の資料を総合させることで、富野の演出における思考のプロセスを一望できるようにした。

会場の要所に展示したプラモデルや玩具についても触れておきたい。これらの展示もすべて担当学芸員の希望によるものである。玩具類については現在入手不可能なものが多いため、アニメーション研究家・玩具コレクターである五十嵐浩司より借用した。また、1980 年代のガンダムのプラモデルブーム時に注目された作例の制作者であるプロモデラー・ＭＡＸ渡辺より「60 分の 1 グフ」を借用した。そのほか、筆者、工藤が私物のプラモデルや玩具を貸し出したり、入手可能なプラモデルを展覧会経費で購入したりしている。特に 1980 年代のアニメにおける玩具やプラモデルの展開は、商業アニメにはつきもののマーチャンダイジング（商品展開）を超えた社会現象として現れた歴史的経緯があるため、欠かせない展示要素であった。

さてこのように準備された展示は、どのように見えたか。繰り返しになるが、「富野展」では１アニメ作品を１学芸員が担当した。つまり、すべての展示プランを１人の学芸員が考案したわけではなく、複数の学芸員がそれぞれの展示案を持ち寄って合体させた、と言ったほうがわかりやすい。アニメの中間制作物で構成される展覧会は、展示内容が２章で示したものに限定されるので、展示の流れが単調になりやすいが、今回の方法より、我々はこれを回避することに成功した。各員の展示意図が明快に表れたものを、ほとんど調整しないでつなぎ合わせたため、７人７様のプランが鑑賞者を飽きさせることがなかったのである。仮定の話だが、今回の企画チームメンバーが再び集まり、担当アニメを総入れ替えしたら、まったく違った「富野由悠季の世界」が出来上がるのではないだろうか。事実、今回展示していない資料はまだ膨大にあり、また同じ資料でも語り方、見せ方次第でその意味も変わることだろう。

結果、１～２時間どころか１日かかってもすべての展示物を見終わらないほどのボリュームを有する展示内容となってしまった。これは、通常の美術展では考えられないし、また来館者サービス的に見てもあまりやるべきではなかったかもしれない。しかしそれに関して、観覧者からも不満は聞こえず、むしろ何度も会場を訪れ、複数の巡回先にまで足を延ばした観覧者も少なからずいたようである。

さてこれが、富野の言う「概念の展示」になっていたのかどうかは、当事者である我々には冷静な判断ができない。しかし、アニメの展覧会の企画に関して、一石を投じることができたのではないかと自負はしている。

７．おわりに

日本で初めてアニメ映画が制作されてからすでに 100 年以上が過ぎ、初のテレビアニメ放映から間もなく 60 年を迎える。現在、日本発のアニメはＡＮＩＭＥとして国際的に通用するようになり、優れたクリエーターも多数登場してきている。こうした歴史の端緒を担ったパイオニアたちは、かなりの年齢に達し、鬼籍に入った人も多くなってきた。日本の大衆文化の一翼を担ったアニメに歴史的な観点から注目する作業はもっと行われてよく、完成した映像から読み取れる内容に加えて、今回展示したような実資料を基にした研究も今後盛んになることだろう。

サブカルチャーの展覧会の中には、プロモーション目的のイベント的側面を持つものが多々見受けられるが、監督やクリエーターといった個人の業績をきちんと示して評価顕彰するという、美術館発の展覧会においてはごく普通の意図が貫徹された内容のものがさらに期待される。

＜註＞

（1）山口洋三「「富野由悠季の世界」―展覧会開催にあたって」、『富野由悠季の世界』、キネマ旬報社、2019 年、pp.6-8

（2）山口洋三（インタビュー）、『グレートメカニック G』、2019SUMMER、双葉社、pp.40-43、および「6 つの美術館が連携して実現した「富野由悠季の世界」展の道のりを、学芸員・山口洋三が振り返る【アニメ業界ウォッチング第 84 回】」、『アキバ総研』https://akiba-souken.com/article/53725/ （2022 年 1 月 25 日閲覧）

（3）工藤健志「公立美術館において開催される漫画、アニメ展に関する一考察」、『アートスケープ』、2019 年 8 月 1 日号―「富野由悠季の世界」展と「シド・ミード展 PROGRESSIONS TYO 2019」 https://artscape.jp/report/curator/10156250_1634.html （2022 年 1 月 25 日閲覧）

（4）一般の人文系ミュージアムで開催したサブカルチャー展の考察に限れば、例えば山本哲也「サブカルチャーと博物館」『博物館研究』vol.49　No.8（554 号）（特集　サブカルチャーと博物館）、日本博物館協会、2014 年 8 月、pp.6-9　　東谷隆司「マンガの展覧会は何を提示したか　大衆文化と芸術、社会性に関する試論」『美術手帖』No.876（特集　マンガは芸術か？）、美術出版社、2006 年 2 月、pp.89-98 などがある。

（5）例えば以下のインタビューを参照。

富野由悠季（インタビュー）「富野由悠季の世界―「僕自身も衝撃を受けました」」、『神戸のタウン誌　月刊神戸っ子』2019 年 11 月号　https://kobecco.hpg.co.jp/44592/ （2019 年 11 月 10 日閲覧）、

同「アニメーション映画監督・富野由悠季、クリエイションの源泉に迫るロング・インタビュー／第 1 回・文化功労者への選出に寄せて」、『アニメ　ダ・ヴィンチ』
https://ddnavi.com/interview/913740/a/?utm_source=ddnavi.com&utm_medium=cushion&utm_campaign=related （2022 年 1 月 16 日閲覧）

＊文中の敬称は省略した。

(15) 近藤滋弥（一八八二―一九五三）。実業家、政治家。東京鉄道の技師を経て大正十五年（一九二六）横浜船渠専務、のち三光紡績社長など。大正十年（一九二一）父廉平が没して男爵を襲爵。貴族院議員。

(16) この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一二一～一二二頁所載の「廣尾其日庵お目出度の茶　五月十六日」にも記録されている。

(17) 遠州流十一世・小堀宗明（一八八八―一九六二）。しかし前掲註（16）の松永の記事においてこの部分は「小堀宗匠の長男十九歳の若宗匠の点前で」とあり、十二世・小堀宗慶（一九二三―二〇一一）のことと記録されている。

(18) この「茶道三年」とあるのは、正しくは前掲書『茶道春秋』のこと。ここでは、同書下巻・一二〇～一二一頁所載の「祥雲寺の大振舞　五月九日」の記事を書き写しているが、一部の記述に異同がみられる。

(19) この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一三四～一三六頁所載の「禾日庵朝茶　七月十四日朝」にも記録されている。

(20) この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一三七～一三九頁所載の「葉山に蘭奢待を聞く　七月十七日」にも記録されている。

(21) この「三原」とは「三溪」の誤記か。

(22) この「茶道三年」とあるのは、正しくは前掲書『茶道春秋』のこと。ここでは、同書下巻・一三九～一四〇頁所載の「祥雲寺の魯堂忌　十月十四日」の記事を書き写してはいるが、道具組の記述等に異同がみられる。

〈註〉

（1）この茶事のことは、松永耳庵『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一一六～一一八頁所載の「祥雲寺の双会」にも記録されている。

（2）この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一〇九～一一一頁所載の「上巳節句の掃雲台　三月二日」にも記録されている。

（3）加藤灌覚（一八七〇―没年不詳）。本書影印本の「人物略解説」七三六頁に「朝鮮総督府記念館館員」とある。生年については金広植「「韓国併合」前後に帝国日本と植民地朝鮮で実施された民間伝承調査」（『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』四、二〇一三年九月）に拠った。

（4）小磯國昭（一八八〇―一九五〇）、号は葛山。軍人、政治家。昭和五年（一九三〇）に陸軍省軍務局長、十七年（一九四二）に朝鮮総督、十九年（一九四四）には東条英機の後を受けて内閣総理大臣（第四十一代）を務めた。

（5）藤井浩佑のことか。藤井浩佑（一八八二―一九五八）、初名は浩祐。彫刻家。日本芸術院会員。

（6）桃山時代の伝説的な茶人・丿貫（生没年不詳）のことと思われる。

（7）大倉鶴彦（一八三七―一九二八）、本名は喜八郎。実業家。男爵。幕末に武器商人として財をなす。明治六年（一八七三）大倉商会を設立し、貿易事業を開始。日清・日露両戦争を通じて巨利を得た。その他、ビール、皮革、劇場、ホテルなど多くの事業を手掛けた。狂歌をよくし、美術品蒐集家としても知られる。コレクションは日本で最初の財団法人の私立美術館・大倉集古館の開館に結実した。

（8）本多次郎は、東邦電力社員で松永耳庵縁者（本書影印本の「人物略解説」七四五頁）。『松永安左エ門翁の憶い出』（財団法人電力中央研究所、一九七三年）の中巻に寄稿し、松永との思い出話を綴っている。

（9）この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一一一～一一三頁所載の「奥床しい今里・彼岸の茶莚　三月廿一日」にも記録されている。

（10）加藤犀水（一八七一―一九五二）、旧姓は平林、本名は正治。法学者。実業家加藤正義の養子。明治三十六年（一九〇三）東京帝国大学教授、昭和六年（一九三一）に定年退職し、名誉教授。帝国学士院幹事、三菱信託株式会社監査、帝室博物館顧問、中央大学学長など。

（11）この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一一三～一一四頁所載の「加藤家慶祝　三月廿六日宵」にも記録されている。

（12）加藤犀水の子息に「正武」という名の人物は確認できない。前掲註（11）の記事において松永耳庵は「加藤正治翁は御長男に嫁を貰はれ」云々と記述していることから、長男正徳のことと思われるが定かではない。

（13）この茶事のことは、前掲書『茶道春秋』（昭和十九年刊）下巻・一一五頁所載の「千駄ヶ谷魯堂老見舞　四月二日」にも記録されている。

（14）この時の大師会のことは粟田有聲庵「春遍照の大師会 於護国寺茶寮」『日本の茶道』一〇三号（昭和十六年五月号、日本の茶道社）にも記録されている。

一周年 尺八花入　斯く満眼の上因果経迄披観せるはお盆での冥加とも言よふ。其上夜食岐阜鮎の塩焼野菜料理迄頂き敬山老師の応無所住而主其心、の法話を聞き日没雨中帰途につく。

○長兄魯堂忌　十月十四日

p 361

長兄逝きて既に三旬を過ぎた。其間固疾胃腸病を押し迹仕末やなど過労続きて半ば病床に臥した。直兄の早逝 次兄六十有四才にて韓土に他界し唯一人の長兄又生涯を美術に建築に趣味の茶道に至りてハ東都の大家に倍し然も侘びを趣尚については群を抜き数寄者間にも嘱望されつつ数寄の一生を終りしが孤独となった私にハ長兄の死去は哀惜痛恨にたえぬ

病床にも故人の為 茶友のお集を乞い追憶談でも聞きたいと考えしに幸ひ小康を得たので左の方々のお出を乞い一会を催した（松永耳庵翁 田中親美翁 松永夫子 中村好古 福田喜平君 病気不参）

猶これからの記事ハ松永さん茶道三年[22]より抜粋する

十月十四日魯堂老逝き廿五日目 疲れの為病臥中の政斎子より夫婦諸共茶に参るべし旨なりしも妻の方も是又風邪で欠席 耳庵丈祥雲寺にまかるると田中大人 中村 福田君の揃い

待合にハ耳庵より魯堂見舞の文が何の関葛藤となって故翁を偲ふよすがの目的にて掛らる手きびしいことである

秋露を踏みしげき蛩虫の鳴き残るを聞ながら入席すると

瓢面白く切たるに杜鳥、山菊、水引など挿されたるは露ながらの手向 故人もこの侘に感激して居られむ　鉄菊透ヤツレ 釜探幽下絵 風炉 柿に猿　与次郎作 板ハ 織部　水指木地 阿伽桶

茶入唐物黒平棗 心経ノ文字アリ　茶杓縣宗知作 銘秋の夜　茶碗魯堂作 銘破れ袋　鈍翁銘 蓋置奥多摩 藪竹魯堂作

前茶とあってお炭を省き直ちに点前好の白にてお濃茶を頂く。茶碗は故人作中の逸品、予は非黙翁作一二を除き昭和大正中の傑作たるを疑ず鈍翁に箱書所望の折 翁は愛惜して手放ざりし逸物。故意か不作意か焼成火度の高かりし為か七裂八破し漸く釉薬で繕い、其の喰い違い釉薬が透け、障子の如く、亦高台が片輪カゲたるも面白く恰も魯堂の建築物や庭の侘びを此碗中の小天地に見る心地がした。能くぞ今日に用いられたと思ふ。中立して広間に移ると

奈良薬師寺大古柱の床に長隆筆 地蔵縁起の残欠が掛る 以前よく原宿にて拝見した優物だが、其の時ハよいお幅とのみ思ひしに、今日その画中の伎楽面着た鬼に対する地蔵尊の前身を乗り出せる優姿其の迹にかばふ美女 小児の優婉と無邪気な容姿と色彩は長隆の筆を以ってせざれば描出し能はざるもの。主人いつの間にか之れを手に入れ今日の追慕に掛けられしは一同をして感泣せしめた。

床脇に花入古銅 華瓶 花綿の花 時代根来　盤上に、食事ハ禅堂用 長卓 に応量器を白布に包み 向白あへ　めし松茸入　汁

小蕪 メシハ時代根来 飯器に芋の葉シキ　若鳥野菜の葛かけ　奥多摩若鱒の焼物そへ 汁ハ仏堂用手附など用い

柳瀬農園産野菜の煮物を添へらる。主人の趣向は今や茶人間の粋となりすまし、此割烹の成果は夫人の丹精による事、茶の心入は主婦の努力こそ美味求真の実を掴むものと如実に思はした

故人の思出話は親美大人の口から好古主人かとで綿々と語り出され、秋夜の長きまま尽る所なく夜露を袖に覚え深更帰路についた。耳庵翁の筆をかりると斯く美化せられるが恥しく　魯堂ありし日常連茶友としての方々と一会の偲出に彼れの茶趣を憶ふよすがにもと

△　翌十五日夜ハ遺族茂夫妻 美代さん　横井夜雨老 粟田老をお招きして前夜の如き　にて供養を催した。

「利休居士より　太閤様此頃お茶湯にお心をそめられ給ひし如此のお言葉也あまりありがたきに記之
三斎宛文　此頃小柴垣つくらいてあわれ誰人なりとも思い暮候共差当たる心もなく候明昼中のけ敷■」
「あわれこの柴の庵のさびしさに　与様御衆中花挿を掛けしも」　新居を構へても病弱のかこち心に侘しく過す病兄の現実にもふれしかに見えるの
みか濃茶を練る衰体の様が影暗く感じられ、茶友に進める手元にも耐がたきに私ハ少ながらず不安を感じた

お茶が終り暫し広間に体を横たへながら知友の茶談に興を添へ、浜辺雀の宿に帰る

疲れの兄も茶友の方々の来訪に喜ぶ内にも病床に横はりながら淡茶でも差上たいが家内代点にてお招を願ふと　床ニ一休和尚の偈（三冬時節極重荒、祝在湖辺水石間、氷合断橋留宿棹、柳枯危峯見宥山廻途駿■来連、過眼霊龕去不還、最是黄昏如風■、老梅枝上月飄々」

文明九年二月廿七日
大燈五世華叟一子叟正伝純一休書之」

床脇ニ光広卿が田家に寄する書画の長巻ハ料紙も良く田家耕作の図が卿一流の流麗洒脱の筆に描かれてある

間もなく食事に鯛茶荒煮　茄子の鴫焼などにて病床に膝を交え快食したのに魯堂も心から娯に見えた

折柄縣次郎君も来られ一坐一段と興を加えた。食後床に佐理卿紙捻切　雲海過々「ひさわたのそらも支となき和田つみに雲よりわたるひそ暮にけり」

森戸の岬江の島不二の峯々の海波に写る此の社頭に此上なき歌の意を満坐感嘆しつつ

茶碗花三島の大疵あるも捨がたい名碗にて淡茶を巡服した。想い掛ない今日の一日ハ病兄の喜はさる事ながら迹の疲労を考へないでもいられなく

耳庵翁田中翁と共に六時と云ふに小雨をついて帰京した。

△この十七日から凡二ヶ月を経し九月廿日　兄は病い極りてこれを最後に生涯の嗜好たる茶碗も手に触れず不帰の人となった。私ハ十一年を経し今日この日の記事を誌にあたり我亦齢晩生乏しく当時を懐古し感慨一入深く耳庵親美翁幸い健在なるも式守宗匠既に逝く人生正に夢の如きものである。

○雨の柳瀬荘雅会　七月廿日

P 359

田中さん等親しき友を招き雨中の茶を催したいからお腰を上げてお出掛されたしとの事　幸い涼くもあり

出掛ると途中志木にて横井夜雨老　粟田老とも出会い　山荘に着く到着先一服と気軽なお主人志野橋姫絵大茶碗にて斜月亭

縁側から蕭々たる雨の古石棺に滴るを眺め一服する内、田中老も来着さる　広間の床を仰ぐと、芸阿弥筆瀧の山水長條幅が掛る。図中渓谷より登る白雲林間の去来幽居さながらと云ふべく、書院へハ金峯山出土経筒に八仙花が挿されお主人のかいがいしき給仕に水芋汁　茄子のから揚げ　お国自慢の水焚など何の堅くはなき饗応ぶりの折珍客の入来それは平林寺管主敬山和尚であった。黒染の衣に素足何の飾ケなき妙心派の高徳、然も筑前大宰府出身とて親しく相伴会食した。食事がすむと敬山師を先頭に旦坐席に入席する。床ニ平林寺開山石室善玖師の墨跡が掛る。

玉田老師宛偈「前無隠与後無徳、長履踏飜生死関　表装一風印金上下紗地金襴」　風炉ハ建長寺在銘ヤツレに筒釜、お炭ハ大仏供養及古張華籠、羽根大鳥、香合藤原時代華曼破片応用と云ふこの方、水指南蛮松橋亭伝来の逸物

茶入ハ新兵衛白露　茶杓ハ土肥二三作五月雨、茶碗非黙手造銘不出来と秀れし組合にて濃茶が振舞れた。お茶が終り鈍翁三原両翁の偲出話に時の移るを忘れ敬山師の普門品誦経も盆月祖先えの供養である

広間にハ俊頼の二首切「かるままに我名はたちぬ女郎子　いさ同しくば花ことに見ゆ」「秋の野の露におかるるをみなえし　はろふ人なみぬれつつやふる」鈍翁作

○塩原禾日庵の朝茶[19]　七月十四日

P 356

塩原さんは例年朝茶の催しをなされるが、利休宗旦時代ハよく朝茶を催し茶友と娯みを重ねたようだが原さんも又よく日の出前五時と云ふに催され、小田原から益田さん私らハクランドホテル一泊又ハ東京から三時半車で出掛けた事も毎々あり、池の蓮実飯即ち浄土飯を頂戴したものだが、朝茶ハなかなか余程の数寄者でなくば催せぬ物　六時のお案内とて指定の坂下より入門 待合に通ると間もなく（松永お夫婦 藤瀬夫人　粟田老に予）

至極気楽なお連中　腰掛に青銅鰐口瓶かけに茄子形銀瓶　九谷の汲出し香煎　棚の上に色紙光琳上書に其一の筆松原の図　が飾られ楽浪出土馬具断片の鎮子と云ふ何にか本席との連続があるよふ感ずる内本席四畳半ホラ床に入席す

床ニ光琳富士の絵「元禄十二年卯年正月九日夜夢中西本願寺え召され御前に而お話の末何方へも不参候やとお尋あり申し上るに皆夢に江戸へ参り候と申上候（者、参れは富士を見つらんと被仰候如何にも見候と申上候へばそれはよき夢なり急き書写不致由伺に折角御前にありし物包なる料紙に如夢書写致候へば又之れも夢中の事也　正月十日朝光琳」と書添あり扨こそ寄附の上包或ハ鰐の書贔とのツナがりとぞ　うなづかれた　猶この光琳ハ先頃名古屋近藤家売立にて面白き幅と思いしにお当家の有に帰している。例により奥様のお手前にてお炭がなさる

香合鎌倉刻十王の図は時代ハ少し下るも十六日地獄の釜もあくと言ふを前によいお取合である

懐石ハ向北国産イナダ器瀬戸梶の葉形汁ハ蜆椀胡摩豆腐鰊の焼物唐津強魚鯡甘露煮八寸川鰕枝豆香の物澤庵浅漬黒織部

菓子お手製葛餅　已上朝茶献立として申分なく殊に鰊、鯡など蜆汁と共に誠に結構に頂戴した。

然し今一二省略されでもよくはないかとも思はれた。中立は元の腰掛にてお引入を待つ内

お主人お得意の銅羅の音朝霧にこもり一入　寂音木玉して、えも言へぬ茶の妙味を添へる。浄めの席に再入すると床に時代大長籠に　大和朝顔一輪が挿してある

水指空中作矢筈口彫名アリ　茶入竹の根瓢形銘源流茶杓江雪和尚作江雲銘浅茅「浅茅の小野のしの原志のふるも」茶碗宗全黒

にて如何にも軽く取扱かはれし御手きわは流石老練な禾日翁である。空中水指ハなかなか名作にて光甫の手腕敬服の外なく、只、籠の大花入にハ多少異存もある何れにしても喜に耐へない朝茶を感謝お暇した。

○葉山静養魯堂を見舞[20]　七月十七日

P 357

長兄魯堂の病状も多少小康を得 葉山移住後、耳庵翁からも一度見舞たいとの事で幸ひ十七日は母の命日でもあり松永さんとも打合せ、今日昼前品川駅より落合い葉山に着いた。処が森戸の住いは留主居丈にて、山上の新宅も出来したのと東京から式守蝸牛宗匠及田中親美翁も見舞れ、その新宅に出掛ている事が判りそれは幸ひと山の住いに出掛けた。此日式守宗匠の来葉を乞い病体を押し亡母命日を期し

香道の大家蝸牛宗匠に依って名香蘭奢待の炷香を願ったとの事之れは何より突然の見舞に此の仕合ハ深い因縁であると

耳庵翁共悦にたへず然も田中翁迄同席するとは不思議な落合と其偶然を語り合ふた。

床にハ鎌倉期十一面観世音尊像の幅を掛けられあり下にハ原三溪翁と親美翁の写経普門品各一巻及び魯堂写経中はの巻三巻を飾り　三溪翁朱書経筒に式守宗匠に依って瀬戸香炉に東大寺炷香の儀が行はれ、観音像に供へられし後一同聞香を行ふ。この香は特に信長に賜りたる一片が伝りし物を宗匠の話皇国一の名　香と聞くも母の供徳兄の趣味の賜である。香儀おわり廊下続き二畳の小間にて普斎大寂竹筒に銘姥桜　花に百合を挿け　茶入大侘独楽　茶杓江雲和尚作　茶碗魯堂手造光悦風平　石炉にやつれの栗縁　と云ふ侘びしき道具に

古銅に似て　花大山蓮　宗全眉風炉　釜、芦屋羽釜　この飾附の内にお懐石が進らる　向小鯛甘酢　器金襴手

汁鶴菜　椀シンシーウ青豆　焼物鮎　器染附蓮花形　煮物鴨、朝鮮、唐津　手鉢、強魚茄子　赤絵小鉢

八寸鮑青豆　酒器、薩摩金襴手　瓢形　杯（唐津金襴手）　已上見事な食器の絢爛さ特に染附蓮花の鉢など類のない物にて金襴手共に華かである

料理亦小清の包丁にお主人の注意もあってか日頃の手クセなく良塩梅にお甘味く頂く　お炭ハ唐物透の炭斗　匙朝鮮羽根鶴、火箸砂張

菓子越後屋製　已上にて腰掛にて引入は銅羅七点余音も良く大銅羅らしく　再入席すると　床に

宋人、孟益の筆牡丹に杓子　着色雲州家伝来常信中箱　不味公外箱書附と云ふ名絵が懸る。図ハ大湖石ニ牡丹狗雌雄田中さんの話に、この図に似たる物原家ニ二幅

益田家にもあるが紙中今少し長いと　勿論以前ハ帖冊でありしならんと想像す　水指木地曲　茶入、破風窯銘玉霰

茶杓石州共筒　茶碗、松本井戸　この井戸ハ青井戸にて、元松本珠報所持、後佐久間不吸斎（ママ）と（松本肩衝所有者）　伝り黒田家に渡りしと

唐絵の名画を前に名器にてお濃を頂き、露地を広間に移る　床に慶応筆キンコ仙人の幅

床脇に仁清色絵の壺飾、華さを拝見し、お淡ハ宗明宗匠[17]代点に数々の振舞あり

所謂富豪茶の粋を味い亦も広間お庭を経て玄関よりお暇した　屋外時雨て茶興深き日であった。

猶、此の其日庵ハ四十有余年前益田克徳翁の構想にて牛込の本邸に造られしお後この木ノ下坂邸に移され、其日庵濡額ハ勤王の志士坂本龍□の筆との事

○祥雲寺の大振舞

これは病床にて永く茶に親まなかった魯堂兄及これもお病気を久しくお茶に出掛け松永夫人とお

一夕お招きした催に対する耳庵翁茶道三年[18]の記事を其まま抜粋したものである。

歩、蔡庵、主魯堂老　昨年大半と本年三月に入って大病にかかり老体の事とて家族友人大心配したも、この程全快せられたのと荊妻も作冬以来風邪、菖蒲花咲く初夏となって元気恢復したれば、この二人の為五月九日釜を掛るので田中大人と筆者を加へ細雨蕭々の祥雲寺に招かれた。

寄附に鈍翁八十才大正十一年十一月十一日と十一日を三ツ並べてめてたくかしくとある長寿翁の賀の掛物は一同嬉しく感ずる処である

迎付に入席　床ニ銘ひねくれの名尺八に釣鐘草と二輪草とを痩せた姿の野草を挿したのは花入の清雅と共によく取り合っていた。

迹で箱を見ると、軽井沢で鈍翁より送られし翁作ハ判り、寄附も翁でハ重がと評し合った。土風炉に古芦屋真形能く取合っている。懐石の料理ハ毎度庵主夫婦の合作、殊に夫人の手になる美味申分なく況して今夜ハお祝ひ気分とて餘程嬉しかったと見へ小田原流の御馳走そのまま否それ以上であった。

一向キス甘酢　二汁小蕪　三飯　四椀コチ青菜　五木曽川鱒　六鯛の茶漬　七空豆煮物　八冬瓜筍　春牛蒡　九アスパラカス卸あへ

十鯛の荒煮　田中氏曰くこれは大変次から次からと息をもつけぬ大盤振舞、地下の鈍翁に電話してモシモシあなたのあと継ぎが出来ましたお案心下さい　地下からはチリンチリン　イヤそちらに田中が行っているだろう　あれは空豆が大好物だから重箱一ツ位い平げるから遠慮せずに十分出さぬば迹で不足を云はれる　いや結構結構　心入の稗に蓬の団子が進られ中立

再入席すると床に建武の御世 和歌に大家といはれし浄弁の短冊（早苗と題し「住吉のひとしろ小田の松影にゆきあいわせのさなへとるなり」とあり

表装も古く落つき良い心地の物であった成程この一幅があれば兄貴の品を借らなくもお茶が仕たいてあろう水指ハ

信楽一重口　茶入ハ島物肩衝銘五祖　茶杓耳庵作銘葦切　茶碗、古高麗刷毛目銘翁　茶杓にハ

降りもせて霧に烟りて暮る日は何によしきりの声はかりなる　茶入ハ尹部に似たるも島物瓶子に近く如何にも老僧に対する孤

槃のよふに見られ五祖とは宜き銘なり、此壺とも筆者にも縁ありしが目の届かぬ悲しさに庵主に取られし者、今は牙蓋、鉄刀木の挽家も出来袋にも漢東鈍子の二ツが添い貫禄を備へたるハ羨しい事である。刷毛目ハ大疵あれど出来が佳く、見込と高台のよさは云ふばかりなし

特に初音の緑を帯びた色彩美と味覚により愛撫の想が増す。翁とて初銘のよしで兄弟の白

髯童顔になぞらへたるも芽出度　広間に移ると魯堂病中の筆になる牧溪悟逸讃五祖の写あり番茶水菓子が出て善談帰途につく　窓外月景

いつの間にか雨となりけり（兄ハ其翌日より葉山草庵に移地静養す）

御幸行絵巻のお幅と云い、懐石に赤飯迄の賀節に対するお心れ(ママ)に皇軍の武運を祈り広間に動坐　床に雪村筆呂洞賓の図ハ（雲中に飛躍する豪健筆致ハ流石雪村の筆の強さ）　書院にハ（光広筆東海道道の記巻）が飾られあり。光広卿の特異の雅趣満々の筆の跡面白く拝見し奥さんのお進にて番茶水菓子（干菓子）など丁重なお持成を受け皇室萬々歳を祝し意義深きお茶に相伴の栄を謝し辞去した。帰途耳庵翁お夫婦より病兄を見舞たしとのお厚意に穏田迄同行した。病床の魯堂の喜び一方ならず自分亦翁の友情を深く感謝お別れした。

○塩原転合庵の夜会　五月六日

P 351

数日前より園内躑躅も盛り故 松永さん等御連中に一服差上たいと奥さんからお案内ありしも松永さんの都合で今宵のお催となった。正面玄関を右に斜面ノ庭にハ樹木鬱蒼の内に躑躅は今を見頃に咲き誇っている。洋間横より待合に入るとお客組ハ（松永さん御夫婦　田中親美翁　と予）（老兄なき淋しさ）

床に（遠州文佐川田昌俊）宛歌入長文（が掛り禾日庵主自ら蘭湯を進られ奥さんの迎つけに主人と共に入席す）

遠州公が伏見に構へしこの転合庵にハ公の筆庵号三字額を破風に掲らる　扨床に花入織部向掛

花ハ（都忘二輪）如何にも侘に活られてある　土風炉ハ（宗全釜）

お懐石に向（鯛昆布〆赤楽菊形）器（ノンコウ）　汁（生センマイ水辛）　椀（あいなめ嫁菜）　焼物鱒酢焼（赤絵魁鉢）　強魚（筍若菜）　進魚（アスパラガスおろしアへ）　器ハ（高取）（湯吸物柚子ノ花）　香物（澤庵辛菜）　酒器（備前徳利）（瀬戸六角染附の杯）

菓子（生蒸花形）以上のよふな侘びな組合は禾日庵主独自にて茶に適する本旨を尊ばれる点ハ暁雲翁の華（さに比し真に茶興豊である ここにてお炭なをしがあり）　香合（唐物青貝内朱蝶の絵）（炭具何れも寂に徹している）

水指（朝鮮唐津）

茶入（余三中次）袋（二重ツル金襴）　茶杓（宗甫共筒）歌銘「杜鳥きみがやとのやうつらわぬ」■に見む人もかな」

茶碗蕎麦　以上（何れもあか抜した品々にて）奥さんのお手点にて至極結構な濃茶を頂き中立広間に通ると

床に武者絵の幅に（宗全作花入）

ニ花杜若が挿れあり（この花入ハ転合庵）伝来であると　猶この転合庵移転につき「有栖川熾仁親王のお歌（ましわりの昔もいまもかわらぬはみやいこころのあへるなりけり）」等来歴談があり（十時お暇した）

塩原禾日庵主は（富豪茶家の内唯一の侘茶を好まれ）いつも（気取らず美化をさけ茶の侘を他にシメさる丈茶の味いも深く殊に今宵の茶は一曽）翁の本旨を表現され興味深きお催しは近頃嬉しき一会であった（器物有って誇らぬ事こそ六ケ敷はなし）

○広尾近藤男其日庵(15)　五月十六日の夜会(16)

P 351

近藤さんのお茶に招れは今日初て、ツイ近くの有栖川公園そばでありながら、其日庵お主人は故廉平翁の嗣子にてお先代より茶趣味深く数寄者としても先代と共に趣味豊かである。他家でハよく相伴せる温厚の内洒落持主であるお流儀ハ遠州流のよふに聞き及ぶ

門内を這り左に離れ寄附を構えあり（そこにハ御連客）（松永耳庵翁　田中親美翁　藤原暁雲夫婦　山澄不問老）あり予六人）

二畳床附ニハ（木下長嘯子の短冊ニ）水辺柳（柳かけまたやふくとも立田川春はみとりの色そ身はしむ）　新緑にふさわしき物である

黒柿（長盆）ニ（汲出し古瀬戸）水滴応用振出（などが備られ）お主人の迎つけに順次露を経三畳（台目のお席）へ床に（青磁耳附花入）

びていた。誰やらか病兄を慰めんと持込んだ伝に岩佐勝、以筆（源氏物語、不似合ながら牛車残欠）を床に掛け

備前徳利に花（奥多摩からの見舞）の野草を挿けてある（元気でさへあらば奥多摩鮎も解禁前で味えるが昨夜留主居岩田が来ての話で）あった。多摩の花に懐しいと病眼をシバ叩いていた。大師会や先日小田原茶の湯の事など話し慰る内下之関より到来したと云ふ棒鱈の甘煮の外二三の料理で美代さんとも会食した。この鱈の甘煮ニついても偲い出すはお互が郷里母の膝下に居た折生魚など稀れな田舎とて母がよく大嶋黒砂糖で棒鱈を煮てくれ忘れられぬ甘味さがあった。干鱈ハ東京にもあるが二尺以上もある鱈は下之関に限る。それが黒砂ト丈一入甘味かったよと六十年もの昔語りも老境の兄弟対坐ならばこそ懐旧の深い物であった。食事後坐右の茶具にて淡茶を喫し合ふ　茶碗ハ老兄手造楽であった

この茶碗ハ帰りに所望して持帰る　後柳瀬疎開中耳庵翁息安太郎君懇望により贈呈した

○白金暁雲翁天長の茶　四月廿九日 正午

P 349

事変後四回目の天長の佳節、朝から空模よふもあやしくお招に応じ時刻白金ノお席に参入すると今日のお連客既に待合に（松永耳庵翁、同夫人　近藤滋弥男　同夫人　予の五人）

寄附ニ（津田宗及）筆「（金玉満堂（マヽ）真能守、富貴而驕自遺　其咎功成名遂、身退天之道」与物不均股外現成□」の墨跡（浪に双鶴　小硯箱）

（汲出南京赤絵、振出唐津）台溜盆又同じ（丸炉）に瓢形鉄びん（莨盆）桑手附（火入、黄瀬戸）

中々の優品である

間もなくお主人いとも丁重なお迎附に耳庵翁先頭に囲いの露地に降り立つ（其頃より雨となり若葉に滴る春雨に宏大な庭の景色一入深み茶情を）添へる　お席床を仰ぐと（竹にもあらぬ異よふの）花入に花ハ「白雲木、広葉ニテ藤花に似る深山七かまど、大和草赤の三種何れも目珍さに」（お主人の説明に依れば花ハ何れも樺太台湾産にて芦竹）　花入ハ（天皇台湾行幸の折のお野立所に用いし台湾竹を用い花入に作り献上シタル一節にて）　銘瑞、竹と申ますとの（こと）　今日長天節に之れ以上の適品なく（お主人の皇室に対するお心入れに一同感激せざるハなく）

釜ハ（利休所持）八幡釜

（地文）あり　釣自在（宗旦在判）にて釣らる（炭斗唐物足つき）　火箸桑（象眼）入　鈌藤豆　羽根鶴、敷（替り組）　香合（志野宝珠）　已上にてお炭手前をなさる（お主人ハイツモ微笑客に対する温容は実業界を駆使せられた巧者の態度の中に主客）との応答振りも豊さがあふれる。扨お懐石ハ　向（鯛の甘酢）器（朝鮮唐津）須浜形

汁（小蕪）　椀（鶉シンシーウ藤豆、柚子）

焼物（興津鯛）織部手鉢

進め魚（コノ子）刷毛目平鉢　煮物（鴨叩）酒器（祥瑞瓢杯井戸）

外　湯吸物八寸など型の如き柏屋包丁の自慢の腕に翁入念がこもり正客も数杯のお進に陶然たる歓饗である。扨刷毛目平鉢につき（お主人のお話でハ私が朝鮮行きの際或る道具屋から、これは発掘品であると見せられしが、私ハ之れハ伝世品と見て商人の宇闘さを心に喜び立派に茶碗に使えると買求めました所謂堀り出物ですと、大分お目ききのお自慢であった。）

それ丈お素人の愛嬌があって面白く、天狗話も終り中立

お家柄食器ハ何れも見事なお品中でも煮物鉢仁清（菊形）香の鉢（雲鶴三島）に至る迄美を尽されている

お菓子ハ越後屋製（桜花形）貴人口より腰掛に降りシキる春雨霞み大宝塔の眺め一段と景色を添ゆる内お自慢の銅羅の響きは谷をかすめ雨中を消て行く。　再入席　床にハ

絵巻（残欠）御幸牛車の絵が掛る　水指（南蛮縄簾）中　茶入（薩摩丸壺）袋（花鬼金らん）　茶杓（石州筒ニ宗関桑山猪兵衛様とあり）茶碗、雨漏（水戸家伝来）　建水（黄薬瀬戸）　已上お道具組ハ（何れも秀れし品々中でも水指ハ縄簾中比類であり、茶碗雨漏のシミの具合）　形ハ

（熊川に似たる）高台の土味凡て上々殊に今日の雨中にハ猶更興味深く茶味津々たるがある。

○小田原掃雲台為楽庵　四月廿三日 正午

P 346

益田貞子夫人よりお約束の通りのお招きあり、同行を約した（中村氏が横井山王老と来訪され、横井老とハ自宅で失敬し、新橋駅に出る。駅にハ伊丹揚山君が二等乗車券で、我々ハ三等車に、処が超満員で身ウゴキならず、結局二等車に飛込む）

小田原に着くと、藤原暁雲翁と落合い、迎の車で掃雲台へ

お客組ハ（藤原さん御夫婦　予ニ　中村好古氏　伊丹揚山の　五名）

朝から空はドンヨリ雲たれているが、気候も良く、葉桜時分とて、いつもと替り、お玄関横より庭内にお引入れられ、広間を右に渓流の石橋を渉り丘の上に設けられし腰掛け待合に到る

林間土足の壁床にハ（為恭筆　芦手絵）狂歌入の横物　（瓶掛に　ヤツレ鉄瓶）青貝（小硯箱）振り出（唐物）お湯の用意あり　谷をへだてし為楽庵より貞子夫人のお迎い附の姿も鈍翁あり頃其のまま一礼の後 藤原大人を先頭に（順次入席）

床ニハ一休和尚五行「看矗江山千萬里」釜古芦屋　炉縁元興寺古材（炭斗唐物籠、火箸桑柄　鈬　鈍翁九十才の紀念物）

香合（染附竹ハジキ　隅田川）　已上一休和尚江山千萬里は秋ならずとも萌出る若葉に対する趣きに、隅田川香合も桜の名残りに興味を添へられて季節に適ふ組合（ママ）である。

お懐石ハ　向（鯛の甘酢　器ハ色絵）祥瑞八角、汁（鶴菜　地みそ）椀（鮑のキモ　シンシーウ）海老（若菜）蒸魚あわび 器ハ志野　煮物

筍 織部鉢　八寸（キス干物　青豆）酒器（飛青磁瓶子　杯刷毛目、染付）菓子（お手製羊かん）など（材料も替った献立にて甘味でありお心入れの程も現ていた）　中立は元の腰掛に（渓流のセセラギ渓谷にハ故翁遺業椎茸栽培の林立せるを見るにつけても奥懐しさが憶ばれる）

間もなく再度のお迎に入室すると床に釣り花入

砂張（佐久間将監）ノ箱花（白根あおい　深山鉄仙）

水指（黄瀬戸　遠州蔵帳）茶入（唐物　独楽）

茶杓（利休作節高　筒に山吹のちやく云々）茶碗（玉子手とあるも　熊川ならん）銘比翼（克徳翁　旧蔵）

花入釣り舟の形ちよさと花の取合誠に申分なく茶器全体の美にして侘びあるなど鈍翁とハ又格外の趣きあり。前席一休の書も普通乱れ書きよりは真面目の筆法にて表装中廻し丸紋紫地印金、上下上代紗にて見事なお幅であった

特にお懐石中番台に鯉のお刺身はお主人より父が好きであった物ゆへと進められしは正客初め思はぬお振舞に初鰹を頂戴し岳父偲出を添られし事を喜びつつ、お在世中にハ餘りお使なき真熊川茶碗に、これ程の物を秘められしも不審ありと評し合ひお主人のお見立を賞し 広間に移る

床に元人李迪筆唐犬の幅が（見事な表装にも古来大切に尊ばれし）と思はれ（書院）宗達（伊勢物語冊子二十数枚）

この伊勢物語ハ兼而拝見したいと念願していた丈誠ニ仕合にて（流石宗達 実に結構であり驚嘆此上なき名冊である。）

一同と今日のお催を深く感謝し三時半お暇 帰路についた

大師会に如何に名品が列へられても、お茶の興味は、あの雑沓では求められない。近頃は興行的に化した茶 一客一会など望めない　それに引替へ今日茶こそ真に茶興をそそり娯であった。

○魯堂病頭の一夜　四月廿四日

P 348

茶の湯に列し得ない病兄から一品手に入った 家内を伴れ出掛ないかとの電話　出無性の妻を置いて又穏田仮寓に出掛く。幸ひ病勢も多少衰へたよふで病室に起き自分の着くのを待わ

東都茶事の高峰大師会も続いて行はれ今日でハ大衆化し御殿山碧雲台当時に見る茶事の面影はうすらいだが、何と言ふても此の会丈ハ見逃しがたい物である

先づ展観席ニハ大師坐右ノ銘の外　隆国卿筆山家水鳥、旅宿狸火　堀越家蔵の熊野懐紙の外

雅経山路眺望暮里神楽　同筆暁紅葉花有　根津家信綱卿花有悦色　七海家家長卿花有歓色　馬越家　この外範光　通親卿、寂蓮

などの懐紙席を見て、円成庵に寄附ニ珠光茶杓の石州の文

床貫之高野切「長谷寺へまいりつるみちに奈良の京にやとりける時よめる」「二条源のいたるの朝臣のむすめ　ひとふるすさとおいといてこしかとも　奈良の都もうきななりけり」

花生青磁七官竹の節花牡丹　釜千家名物三光釜与二郎作　縁久以作　澤庵大徹ノ箱　水指伊賀一重口

茶入大名物　胴に大疵アリ奈良文琳　袋細川緞子　茶杓珠光共筒石州文添へ　茶碗白八幡名物鴎　遠州箱　建水砂張置宗和

香合交趾石榴　炭具ハ略す　不昧軒広間抱一着色観音図　黄瀬戸ノ香炉　春日卓に（以上益田宗喜氏の持席）

△宗澄庵（主ハ堀越宗円女史）　床俊頼筆古今集「此の歌或人いはく柿本人丸か四月に咲ける桜を紀利貞」「あわれてふことおあまたにやらしとや春におくれて独聞藍」　外一首　花入古銅桃底　花白玉　釜芦屋筒釟附大根　縁栗久以作　釣釜

自在竹元徳在判　香合青磁瓢形　炭具略す　水指備前円坐　茶杓静楽院作歌銘　茶器桜蒔絵棗宗旦在判　茶碗玉子手銘春霞

建水砂張　已上お婦人らしき道具組であった。

△艸雷庵（藤原暁雲翁）　床俊頼三枚古今集　続「命とて露をたのみにかたければ物わびしらに鳴く野へのむし」

花入古備前銘夕陽　花牡丹　釜名物芦屋切子縁久以　水指伊賀共蓋　茶入瀬戸橋姫手銘布引　遠州蔵帳

茶杓遠州作山吹　茶碗蕎麦五月雨　建水砂張シノキ

菓子器乾漆輪花形　以上

両席共俊頼古今集切なるも其の歌意の季節も適せるや　如何　久以炉縁の多き事　建水ハ藤原家の物上々

△月窓庵（主畠山一斎翁）　寄附床ニ乾山筆拾得画「をつるからは羅ぬ箒もつ人の心の空にちりはなきもの」

広間床へハ澤庵明歴々の一行遠州所持　床脇金銅柄香炉　盆松の木盆裏ニ嘉靖三十四年一合　トアリ立株　書院宗和所持　根来硯箱青磁兎水入　茶入備前砧形

花山芍菜　釜名物芦屋桜花文自在釣徳元象嵌入　釟紹鴎時代比老斎箱　炉縁蒔絵花筏

香合祥瑞横瓜　炭斗唐物口竹透

羽箒敷ハ紙　灰器宗和雲華　匙桑

水指和蘭陀色絵　了々斎箱紀州家伝来　茶器粉溜蜻蛉棗本能寺伝来　茶碗金海小服銘明朗　周防家伝来

替黄瀬戸　茶杓松花堂共筒銘くれ竹　建水南ばん縄簾　蓋置青磁夜学　干菓子器独楽　莨盆一閑手附火入呉須橋人物

以上大師会らしき大家揃いの出陳とて、何れを見ても名器ばかり所謂伝来附ながら円成庵白鴎茶碗の如きハ僧門松花堂所持と云丈にて今日では伝来を云々する丈の物にて、高野切又ハ青磁花入とは、あまりカケ離れ劣る茶碗、数寄者が伝来にトラワレ過ぎても失敗である。

宗澄庵堀越さんハ前ニ書いた通り床内は申分なきもお婦人丈に玉子手茶碗が弱々しく無理からん事　炭具などよく取揃あり大家に倍し遜色ないお席

艸雷庵藤原大人のお席　俊頼三枚続きハお馳走すき、堀越女人の方お茶に適している。其上上代和歌の前に備前の花入は一寸不似合で失敗、茶碗蕎麦ハ各席中の白眉であり群を抜いていた。茶杓又結構であったが、伊賀水指ハ益田宗喜氏に劣る

さて畠山翁月窓庵ハ翁のコリ性とて参観者の期待も大きく、流石伝来曰ク附の品々であったが、澤庵一行にハ私にハ敬服出来ず、今少し他に適幅を用いられたいと思ふ。目先丈替る共、大師会に対してハ少々軽過はせぬか、花入ハ型も目珍し藤原さんより良いが、他の名器揃いからも不似合と思ふ。然し大体に於て炉縁花筏の側に金海茶碗など取合悪く、期待した程の興味なかった事ハ私丈か。会記丈見た人にハ伝来に喜ぶならんも。

八寸（コノ子クルミ）、またたび、何れも加州産　漬物（味そ漬外一）　菓子（金沢羊かん）　主老ハ（有名な酒豪家とて、酒器杯等色とりどりに酒仙振り）

然し中々の心入にハ感謝した

中立中来訪の朝日新聞理事　服部夫人を交へ再入席　床に（虫喰長竹の花入に熊谷草ツル草沢山活け）

水指（瀬戸耳付）　茶入（瀬戸）　茶杓（魚住為楽作法隆寺佐伯老師）　銘　茶碗（粉引写）にて老婦人のお手前後　淡茶あり　茶入（桔梗蒔絵大棗）　茶碗（床屋文七作ト云ふ楽ノ筒）にて心よく頂戴し（お厚意を謝し歓談数刻明月谷の幽居を辞した。）

○穏田病床の会食　四月十七日

P 341

この頃好季節の為茶事を進れつつ自分の健康の勝れざるを忘れ、所謂茶攻の有様。従て柳瀬に於る井上候等の茶もお断したが、亦も耳庵翁より鱒を携へ魯堂ヲ見舞たしとの厚意に其の病床を訪ふ。魯堂兄も少しハ元気つき（此分では葉山にも出掛られると喜んでいた際とて床を放れ、翁と三人食事した食後一服）差し上ると広間に　床に（三溪翁筆草津湯場）の真景　花入ハ 志土呂に（牡丹に幹を添へ）　水指（森川如春老作信楽矢筈）を長板に飾り茶碗（鈍翁作黒楽）　茶入（メン取棗と）云ふ（至極簡粗であるが何れも茶友の作品とて、親みも一段と面白く、こんな場合何よりの興味を添へた）他家の茶に列せられない病兄にとり此上なき慰問に対し耳庵翁の友情を感じた。

○箱根強羅不染庵一泊の茶　四月廿日

P 342

東京の桜は既に散り葉桜ともなったが、箱根の花は今盛りに咲ほこっている　是非共お出掛あるべしと耳庵翁からの進めに午前の私用をすませ午後から出掛けた。時節柄登山電車ハ満員　白雲洞に着しは夕暮時、名古屋からの横井三王（ママ）老らと食事の折とて、よくこそお越と早速膳部の用意に空服とて、一杯の酒にも巌上大樹の桜花を眺め陶然となった（山は流石温度低く食事後山王老の手点に淡茶一服後岩風呂に浴し寝）につく。翌廿一日も好晴入浴後白雲洞広間より眺むる大字山の雄姿林間飛鳥の鳴声を聞く壮快さハ流石函嶺気分である。（この朝老巧の山王老の趣向で朝茶があっタので予ハ又其直後に一会を催した。）

籠に山草を活け　茶入ハ（台処の塩辛入） を　水指（亦漬物入）に蓋ハ（山草の青葉）　茶碗ハ（常什平茶碗で）之にハ主翁初め流石の山王にも一㊐をむくいたよふだ

（今日正午は木賀より塩原禾日翁 服部山楓氏と（山王老に予と云ふ）客組であった。）

寄附に長闇堂の消息（吉野花見かえりに利休老もこられて）云々の長横物　さて献立は（白水の包丁にて）

竹の子飯、（汁ハ山芋）　重詰にて（味そアエ甘鯛焼物）　煮物（ふきウツラ若布）　宮城野そば（青籠）に　田楽（木の芽味噌）　八寸（椎茸焼雲丹）

香物（山牛蒡澤庵）　菓子（名古屋産初鰹ウイロー）にて中立

後席　花入（土肥二三作銘焼け残）　花（杓ナゲ山吹）　水指（木地曲）　茶入（唐物独楽）　茶杓北向道陳作

茶碗彫三島玄涛などで山荘気分の侘茶が場所とて面白く（山気を味い）四時過ぎ山を降る。時節柄にも山への憧れ客多く品川迄列車ハ立つめであった。

○大師会（音羽護国寺）（14）　四月廿一日

P 343

懐石ハ荘内産筍に野園産の蔬菜を主として白水の包丁　遠来とて甘味此上なく食事終り自作蔵餅の菓子

後席　水指備前の矢筈口　茶入新兵衛銘関山　袋浅黄地金らん　茶杓宗甫歌銘古里ハ云々　茶碗彫三島銘玄涛　関戸家より新来

已上寄附から濃茶　道具組を見ても日頃大家への茶事にも見られぬ器物の取り合せ配合になみなみならぬ御奮発であり、それ丈我々にとり此上なき雅趣を得て満悦した。凡て茶と言ふはこんな物、対人によりてハ堅くなり道具本意になり勝、坦々たる心境からにじみ出た物こそ真に意義あり興味を添える物、今日の組合せハ翁に取り近来になき上々のお茶であった。　広間に移ると床に悟逸筆五祖の絵に去る二日魯堂見舞の折予が持参した漢代漆桶を花入に藤花と山椿を挿されてありしハ流石古物好きの楽浪漆桶を懇望され今日携へし瀬津横井両氏も一驚した。

今日の催ハ前にも誌した通り上々の茶であり茶に用いられし刻三島玄涛が早くも耳庵の手に移り姿形ちも色めもよく、この再会は望外であった。この春名古屋関戸家にて

○平松如雪老持出の会　南平台中村邸にて　四月八日

P 339

釈尊降誕の日とて自宅でハ唯我独尊像を金銅華皿に安置し　床に菅公筑紫切紺紙経切幅を掛けた　小間にハ大徳寺江雲和尚　降誕の偈横物にて花祭釈尊ノ高徳を偲ぶ。この日平松老より中村家に持出一会を催スからお出席せよとの事で正午前参入すると　お正客ハ（藤原銀次郎翁々夫人　益田太郎夫人　中村主人と予五客）

先づ離れ寄附ニ鈍翁筆円窓に一睡の一字を掛らる　袋棚上に桐蒔絵　扇面形硯箱　唐紙無地冊子鳥の鎮子　茶道の記事書人しれぬ

瓶掛ニ銀瓶　汲出鈍阿焼、台黒　桜漬赤玉大ニ入レ　手附盆ニ莨盆松花堂好　火入祥瑞　拠暁雲翁のお話に私の熱海茶席用に故翁ニ一睡の二字願をお願した事ありこのお幅ハ其の原稿ならんと　さもあるべき事にて正客に由緒ある丈面白く　入席すると床に金銀下絵散り桜花色紙に（桜散る木の下風に云々の古歌　鈍翁）

釜庄兵衛作筋釜　香合唐津写席主作　伽羅　炭斗ハ寄附盆　主人挨拶終りウヤウヤしく大扇面　再用他ハ省略　上一幅の掛物をノセ改て曰ク

この一幅ハ正客様より鈍翁に一睡の木額御懇望の原稿にて益田家からお預り表装出来いたしましたので改め御献上　申上ますと前席のお幅を贈呈された。扇面ハ大日の丸に鈍翁筆萬々歳の大書あり平松老の其の電激的提供にお正客は其機知を賞揚される内　懐石は運ばる　向キスウド春菜の胡摩アエ　唐津の皿に　汁嫁菜水からし　椀豆腐和布　白魚味飯土鍋持出し　焼物鮭の子ふき　器ハ小代　煮物南京鈍阿焼　八寸若鮎空豆

香物沢庵カラシ菜　番茶菓子串団子　献立も老らしく　包丁は小清丈　に塩梅を申分なく中立

後席床ニ三尺に餘る大ひさご　花入花梨に黒百合が挿れてあるも面白く銘ハ寿老）「寿老こそ老いの友なれと蹈ともに　たのしむ野辺の花もまつらむ」

扨此の花入大箱裏ニ如斯き歌の書付ハ平松老ならずば求められぬよい遺物である。水指志野写蓋赤玉香合フタを応用

茶入黒金林寺　茶杓鈍翁作　銘うそ　茶碗瀬戸黒沓形　以上旧主鈍翁由緒の品々にてお濃茶も趣向を主としての桜

お茶が終り隣室広間ニここにも翁筆平心の大横物　これは翁秘蔵清拙平心を写されし幅　書院に尊暁を飾り　献茶、文房飾等凡て恩顧を受けし鈍翁に対する　報恩の気あふれている　拠母家広間に庭を経て動座すると庭外遠望視野の限り桜花爛満の光景　床ニ守景筆楼閣山水　書院漢銅卣ニ牡丹一輪が活られ番茶など偲出深きこの催しにも永く故翁の伴道に勤めし如雪の心入れハ道具料理にも心尽の外分に応じた物丈特更に意味深く一同大満足であった

猶貞子夫人より来る廿三日頃今日の方々に小田原にて一会催たく　是非当日お繰合くださるよふとのことでお受けし散会した。

○北鎌倉明月谷のお茶　四月十六日　昼

P 340

丸岡耕圃老より一度明月庵燕台老の閑居をおとづれたしと同行を求められ老から来遊を進られし事とて好天の今日十時から出掛た。最明寺入道終焉の地ここ明月谷の閑寂ハ廃寺であるが、鎌倉幕府盛事禅門五山の道場の迹とて昔の■りは時頼の古墳などにも面影を遺している

詩家文人である老も時流に押され近頃茶の道にも多少転向気味である。然し寄附にハまだ清朝人山水小幅、文房飾りなど老の趣味が現れている。

加州出身丈北国風の席に通る床に大徳寺天祐和尚、明月二大字横物も場所柄に適す釜は新物にて煮ている。

先ずお食事と向キスハサヒ　汁板ワラビ加州産　椀鯛に嫁菜　焼物鱒織部鉢　煮物筍若菜　手附塗物に

一寸小康を得ていた魯堂兄も去る二月十七日再度亡母命日の日、倒れて以来原宿穏田美代子さんの住で静養を続け茶事も遠ざかりつつ最近多少元気つきながら無聊をかこちてあるので、それが慰問として兼而松永耳庵翁が名古屋に依頼しておいた、河鱒が届いたから、それお携へ見舞たいとの通知を得たので穏田に通じると、それは難有、是非同行をとの事で時刻を打合せ四時に出掛た。

茶人としての兄が（茶友に遠ざかる苦痛は兄のみでなく、茶友としての耳庵翁にも久しくお会せず三溪翁なき迹は猶更我らは、兄の快復を祈り、今一度常連組として再起を期待せるも、何分の老躰を如何せん、松永さんの見舞に対する喜びは病状を忘れての娯みであった。）

従て不自由な体にも折角お出が願るかとて、お茶の用意を整えた。

この日自分は兄の娯みにと、最近手に入れし楽浪漆桶金銅輪の珍品を携へていた

耳庵翁間もなく鱒を携へて来られた。

鱒を主として美代さんの料理にて病室枕頭で病兄を交え親しく会食した。

病衰の兄も心から耳庵翁の厚意に感銘し今一度再起を望んでやまなかった。食事が終り広間に茶の用意を整ゆ。床に「浪波切　施頭歌　卜題し　春日在三笠乃山尓月母堂奴可母佐紀山尓　聞有楼之花乃可見、卜云ふ万葉歌一首」「かすかなるみかさの山に月もいてぬ　かもさき山にささるさくらのはなのみゆへく」　此切ハ現在有栖川家及び高松宮家に現存する外、この分のみと

春慶（宗和好　柳に）御本竹の絵水指　釜（扇面地文　写し新）　茶入金輪寺（茶杓、石州）、茶碗柿の蔕　花入ハ青磁竹の節（花白玉　花梨花）を添へ老躰を起き出で娯さのあまり自ら濃茶を練り、耳庵翁より順次魯堂（美代さんともに）巡服した　二月来の病床に病衰した長兄の姿に私は強く胸を打れた。然し劇務をさいて松永さんが数度の見舞に兄と共に深く感激した。

お茶がすむと兄から私に　携帯の楽浪漆桶に（花を活けてほしいとの事で元の花を其まま）　床に活け替へた。（兄の喜び流石二千年を経し古色蒼然たる内に金銅金輪の金色にハ）青磁花入とは又格段の相違ありとて其観賞と共に興をそそった。

この漆桶ハ後日耳庵翁の切望によりお譲し永く愛玩せられしが博物館寄贈美術品と共に同館に贈与さられ現在博物館に保存

○柳瀬山荘雨中の茶　四月六日

P 337

今日の日曜を期し埼玉山荘で一服上げたい　連客は内輪丈との速達にて案内があった。（夜来の春）

（雨なお止）まず、一寸考えたが春の雨中は山荘の雨情も深からんと、雨をついて出掛けた。

桜花もこれからと言ふ季節ハ上々大和田橋からは山荘東山の杜に太く高く聳ゆる

山桜葉は松林中目にうつる　連客はと見れば（横井夜雨の外燕台老、宮島、粟田　瀬津君ら家の子郎党に予）

大炉板床に（近衛鷹山公より三宅亡羊宛の）消息「我やとはをのおくにはあらねとも　雨もふれふれくといもよをかし一笑く」「二三日は不見参候此内の雨はいつも替し哉　三月晦梧」と今日の雨に此上なき意味を深き文　が懸り庵翁の風流ますます深く見受られる　信楽の大壺に桜花沢山投入あるも三溪翁を思い出さる。露地傘に（雨をさけ且坐席に）繰込む　床に（俊頼集遺集切　下絵藤花に飛鳥）

「あさしはら主なきやとの桜はな　こころやすくや風にちるらん」

寄附と言い（この俊頼の歌意には）主人一人の娯みのみならんや（時をとりての適幅である）　釜（亦古芦屋桜地文）　石炉に（時代黒柿縁）

香合（志野　頭巾）、炭斗籐ノ平、羽根鶴、鈬張板、火箸桑柄　にて目珍く炭手前も（雨に落着き気分か、花入ハ翁自作鷹ヶ峯竹）　花白玉

開の牡丹の挿れしハ　寧ろなきぞまさるとも云ふべきか　猶田中さんからの無理に所望されし光悦の巻物ハ（見出ハ竹の絵 次に梯の枝）紙中の（中ばを〆る程に 絵かれた）雄渾の筆致にハ宗達の手腕健筆がよく現れ光悦の歌文字亦秀れた名巻にて末尾に（上下に金銀泥の土坡を描き 躑躅が描れてあった。）以上心ゆく迄名器名画を味いお主人の入念なる配合に且つ味い且つ眼福を得　厚く謝意を表し散会した

○加藤犀水翁[10]の夜会[11]　三月廿六日

P 334

前日電話に書状のお案内を得　娯みながら、上目黒同家に出向く（途中松永さんの車に会い 同車して参入すると）（松永さんの外先着に杉本 堀越夫人 田中の両翁あり 予ハお詰役）待合洋間ハ（目も覚る斗りの 抱一筆高砂の）双幅を掛りさては御慶事のお催と噂するに（田中翁から実ハ最近 お令息のお芽出度が）ありし故　其のお披露ならんとの話でうなづかれた

洋間ハ（抱中の筆雛の屏風で 囲はれ 有職模よふ）粟田焼（瓶懸に 銀瓶）汲出（朝日焼 振出）赤玉呉須 （出台 真塗）と云ふ麗いづくめ

（遅れ馳に 堀越夫人）も来れ以上五人　庭からの迎附に耳（庵翁先頭に杉本堀越夫人と順次黄昏の庭を 一木庵に入席）

床砧青磁（竹の節 花入）花ハ（紅牡丹 枯樹そへ）釜ハ（繰口蔽、前後 六ヶ所桐紋アリ）古芦屋（常 紋）釜ト云ふ（鈍附 紐文）縁桑　石炉

主人出坐謹厳なるは学者丈にお炭ハ（黒のクヅ桶 皮巻火箸）鈍豆（象 眼）羽根鶴（敷籐組 かはり物）灰器南ばん白土

香合（呉須 木瓜）（甲ニ道士、前後ニ 漁樵問答、竹の）絵（遠州 箱）以上拝見終り懐石　向（鯛昆布〆 器金襴手）汁（地味噌 早蕨）

椀（鶉シンシーウ 白魚人参）椎茸小蕪　焼物鱒（器朝鮮 唐津手鉢）進魚（雲丹 志野四方）煮物（筍 ふき）赤絵平鉢（田楽 木の芽 湯吸物土筆頭 ニ針生ガ）八寸（伊勢海老 空豆松葉刺）漬物（澤庵 花野菜）織部菊形鉢、酒器（銚子染附六角 松竹梅の絵）徳利（備前 緋たすき

杯ハ（六ツ捻、薩摩 金襴手）菓子ハ（お手制 餅）お献立にも（お婚儀に適せるお心入も美味この上なく食器 等お家柄見事の品々にて頂戴中立す

元の洋間ハ（四季耕作の図 屏風に囲）まれ莨盆（火入 尹部）など備えられてある（間もなく銅羅の音ハ距離のあるのと 高台の為幽に聞え幽玄其の者である

餘音深き中に 点々たる手燭の）火をたよりに情趣を味いながら入席すると　床ニ（霊夢 堂ノ）墨蹟（題ニ鶴巣トアリ 細字）

にて（「碧花僊遊己僊飛 鳥云々ノ横物」）表装（又鶴の 刺繍）ハ御慶事にハ（無双で ある）水指（伊賀 瓢形）共蓋 茶入（瀬戸 遠 玉川 州）箱、

茶杓（利休作 宗旦筒）茶碗（古井戸 小貫入風）（建水曲 青竹切）已上入念にお練りなったが大服の為お詰役ハ一寸困った

茶入ハ名物（なるも 私にハ）餘り感服（出来ず 水指ハ）出来も良く（近頃各家に伊賀の花入水指をよく用いられるが、其の 多くハ古伊賀に属せず所謂藤堂伊賀と称する

（一時代後の作品にて 茶家ノ為ノ作柄）である　茶碗ハ（一点の疵なく 古雅申分なき）名碗にて茶杓又利休とうなづける良い物であった。

御慶事のお茶と云い御主人の沈着其ままに一同亦厳粛の内に拝服し、廊下を経て広間に動坐

床にハ（信実筆 歌仙切）従五位馬助（重 之）（佐竹家 伝来）が掛かる「よしの山見ねのしら雪いつきして（ママ） 重之ハ

花入（染附 鯉耳）銘（高砂 花生）ト称ス　書院（二見ヶ浦蒔絵 硯箱、徳川期）床脇（七宝鶴の 置物香炉）風炉唐金三足

けさはかすばの（ママ）たちかはるらん」 宰相兼忠ノ三男」

釜桐文　水指（祥瑞 蜜柑）杓立（砧青磁 以上）長板　茶碗（雲鶴筒 赤味アリ）替（了入応挙 鶴の下絵）杓象牙（干菓子盆 堆朱

十二畳の広間に已上の如き華かな飾附にてお新郎正武[12]さんのお手前に花嫁ごの運に一段と艶厳さ（ママ）さを添られ御慶事を祝福お家盛栄を祈りお開き辞去した。（猶御祝儀御披露茶とて茶の幽玄 を望ハ無理な注文にして名器拝 見にハ此上 ないこと）

○耳庵翁魯堂見舞の茶[13]　四月二日

P 336

広間にハ普斎作銘旅枕の竹花入に山椿黒ぶしを挿け「藤原未彩画十観抄の断欠」龍樹菩薩の幅」書院にハ六角時代蒔絵珠数箱金銅金具附ニ之れも時代の水昌珠数両品とも鎌倉中期の物青磁三足香炉に名香が炷せられ、お彼岸に対する飾り附の内、番茶水菓子にも不自由な折とてお薩蒸し立ても翁らしく怪談風発に時を過し最後に又も悟逸

横物墨跡を拝見した前者ハ前山家の旧蔵 後者ハ中村君の推薦とか。余ハ悟逸にハ興味なし

猶この日畠山家の夜の茶の湯に招れをり時刻迫るので翁をウナガシ急ぎ帰京 今里に馳つく。

○畠山家今里庵夜会(9)　三月廿一日夜

P 331

日支事変以来日本ハ東亜の指導者と自任し中国亦頑強に抵抗すると共に戦域ハ拡大するがまま国勢は窮迫し物資の欠乏は統制に統制 国民生活ハ窮乏の一途を辿る中にも、茶の湯ハ一部階級に催されている。事局柄多少慎むべきは勿論であるが、数寄者にハまだまだ非常態制的催しが行はれている。然し一面趣味に於てハ精神的にハ人心を融和する方途でもある。

畠山家の茶の湯にも至極親しき方々のみのお催であった

即ちお合客は（耳庵翁　田中親美翁　予ニ　益田貞子夫人　同義信氏　平松老　）

寄附ニは今度の案内状が印刷であったのに対し この案内用紙に 正到伺べく云々として「茶件ハかっぱんにする寒可那の狂歌」の返書が表装され懸られてあった。

丸炉に釣釜汲出朝日焼 青磁酒会壺ニ桜漬台ハ真塗 手炉火鉢共キレイ尽シ御主人の迎附ニ庭に降り腰掛の構にハ原叟筆狂歌

「とにかくにたつときもいやしきも　伏忍丈　桜さくらの入合の鐘　宗左　仏なりけり　と書添あり」彼岸と云期限と云い、予が寺の鐘を打ちしにむくいられしとも見る

お席に入ると床に白竹一重切不味公らしい紅椿銘暁黄イチゴが添られている釜真形霰松梅地紋団扇ニ炉縁栗

香合交趾 桜鯉炭斗下 四方 火箸 桑柄羽箒大 鳥釟象眼敷ハ 紙翁はお炭を始られ炉中の下火幽に残る風情に対する客ノ挨拶に、真面目にも下火の多きはよろしからず 炭はコシテつげば必ず火附はする物、そこに茶人の手練があると何事にも粗略に披はれる正客への教訓気でもあった。我々にハ少々アブナゲとも思ったが、物慣れしお主人とて、お手キワ如何と不安の内名香一炷が終り香合拝見すると、季節に申分なき桜鯉とて、何れも流石とウナツケる。扨

懐石は向赤貝生ノリ甘酢器ハ赤絵 菊形汁嫁菜椀白魚シンシーウ 赤めし青菜焼物甘鯛 器ハ備前 煮物若鳥 器ハ刷毛目編傘 吸物菜の花八寸百合根 空豆薫製香物澤庵 カラシ菜器朝鮮 唐津酒器舟形鉄 銚子料理は柏屋との事なりしも 餘り感服しなかった。

香合の良さは言迄もなく灰器長次郎作 佐野屋炮烙は他の炭具と共に秀れし者のみ。食器赤絵向は別として 備前の鉢ハ殊に優物

菓子ハ中立 腰掛にて引入ハ銅羅の さそいにて再入席ニ行成筆 よみ人 古今集 しらず「春のいろのいたりいたらぬさとハあらし さけるさかさる花の見ゆらん」

水指南蛮 縄簾中、茶入薩摩 甫十七宝文アリ 袋漢東 織とめ茶杓舟越伊豫 共筒茶碗鼠志野 ヒガキ銘峯紅葉 権十郎箱

高台廻に白釉アリ名碗 建水曲 置青竹ここに面白きハお自慢の炭がいかにせしや懐石中に釜も沸ず、平松老ハ心配のあまり炉をノドクと之れハ炭は真黒火ハ消えている主人の相伴ハ呑める方丈になかなか出坐がない相伴が長くて、お退屈を掛けましたと挨拶に膳部を引初められた。一坐ハお可笑くてたまらず漸く上機嫌で出坐ドーモ水屋のタマリかね正客ハお主人流石お炭ハご自慢丈見事な火ツキ一度お覧なさいと皮肉な言葉に漸く気附かれ天狗の鼻もクジカレたが主人もクセ者丈お

食事中アマリ熱くてはご迷惑を と存じ火ハ水屋に沢山用意が出来ていますと なかなか敗て居られぬ

こんな一芝居があって、濃茶が練られ一同愉快に拝服し器物の観賞に時を過し 広間に動坐

広間の床ニ松花堂筆 ㊀布袋の絵江月 至宝の三筆が懸り花入伊賀銘からたち 花白牡丹

床脇地袋上に 桜蒔絵小硯箱と云ふ飾り附花入伊賀ハ元金持に有し物にて、兼而名花入と聞きつつ今日初めて拝見し、其の優品たる事ハ恐らく他ニこれ程の伊賀花入ハあるまじと恐嘆した。口辺から二寸程自然の窯破れあるも一段の美を添へ全体えの青釉もイヤミなく、コゲもあり寸法共に稀世の伊賀である。自分は今日迄如斯花入を見しは初めである ただ惜くもこれ程の花入に満

待合床に「光広卿色紙　春の夜の夢ばかりなる手枕に　かいなくたたん為にそおしけれ」瓶掛古鉄車軸透　銀手附鉄瓶鏡フタ寒雉作

汲出、振出、台前回通り　盆根来丸時代　扨引入れは裏門鐘楼の鉦にて広間へ　床の花入ハ自作一重切

寂竹花ハ耳庵翁小田原風祭の薄紅山椿　釣釜肩衿羽釜成安寺ト文字アリ　相変ず炭は省略して、お食事を進む　向赤貝平目味

噌あへ器ハ絵唐津　汁芋のくき鶴菜　椀ヲコゼ、人参短冊　木の芽、焼物甘鯛唐津片口　進魚生雲丹染附小鉢　煮物芋ニ棒鱈器ハ織部角

湯吸物早蕨　八寸生貝、松露青豆　香物澤庵古萩辛菜　鉢

酒器ハ銚子のみにて終りまで　こんなお粗末然シ老妻相手の手料理にて、加減などよかろう箸もなく、長闇やノ滓(ヘチマ)の侘茶人にもあるまじきさま。(6)

さて小間に動座を願ふ　床に古画杜子美の幅　釜芦屋鈦附鬼面　水指伊賀、茶入宗旦在判小棗

茶杓鈍翁作歌銘老松　建水曲　已上にてお濃茶を供した。菓子ハ栗善哉　盆根来扇面形

続いて淡茶にハ水指同前　茶入寂竹割フタ蒔絵　蓬雪好　茶碗小貫入　替二代常慶作黒筒銘独楽一燈箱

茶杓時代牙にてお淡も略す筈であったが、お婦人方の為重ねて笑の種を蒔いた訳亦も広間にお移りを乞い

床に大倉鶴彦翁筆(7)「感涙会に紅艶のさ圖めを見て、狂歌の横物　生蕃のむすめに似たるさ圖め姫首にこかるる所作もより那無　鶴彦　霊水庵、紅艶翁宛」

迹は番茶に水菓子など呈しお粗末ながら所謂知分一会であった。如斯き大家を招と云ふも茶の道ならばこそである

○飯後庵主小磯将軍夫人への茶箱贈呈の茶　三月十二日

P 330

横井半三郎氏より今日正午前　小磯夫人に茶箱を贈る為小磯邸迄お出掛願たいとの事で他に約束ある中を芝新堀の邸に出掛く。横井老夫婦の外天青君、藤井夫人あり　天龍寺、清拙和尚ノ一行　新伊賀の花入ニ白玉ボケが活ッてある　茶箱は凡て新調品である丈気持よく夜雨夫人のお手前にて先づ将軍夫人より淡茶を巡服した。

茶の趣味はこんな友情の■(タクン)さがあってこそ夜雨氏の人となりを敬服し中座辞去した。

○柳瀬荘彼岸会の茶　三月廿一日昼

P 330

穏(ヨダヤ)かな彼岸の中日、快晴でもあり祭日一服内輪丈にて釜懸るからと耳庵翁からのお招きで出掛けた。途中東上線の超満員に苦ながら、然し志木からの田舎道は麦畑つらなる静な野趣、点々たる松林に雑木の杜にも武蔵野気分は壮快の上、晴れし青空に彼岸ともなれば徒歩モ汗ばむ。遠く富士の霊峰さえ一望のこの道、氷川社頭を抜けると、山荘は目の当り浮ぶ。柳瀬川の清流に銀鱗の逆登(ノボ)るを眺めながら山荘に着く。既に瀬津君丸岡老　あり　愛甥本田次郎氏家族(8)同伴

食事ハ五目飯と云ふ田舎風の外二三の料理　街道筋にヒサグ串団子と菓子も野趣まんまん　席に入ると津田宗及の消息文

朝鮮飯銅に鉄瓶かけ朱漆丸盆ニ汲出備前　振出を備へて迎つけ床に唐画悟逸讃伝牧溪筆の五祖の幅　釜、桜地文

炉縁黒柿　釜は初見の物形も時代もよく　季節に適(カナ)い申分なくお主人も得意ケに見受ける　炭斗瓢　香合織部　水指芋頭

鴻の池伝来　蓋(ハン)ネラ　茶入新兵衛作　茶杓北向道鎮作　茶碗志野にてお濃茶を練られた。近来翁は格段の進歩を見せられ、僅か数年ならずに、諸大家との交茶と名品の蒐集ハ、財力は元より流石敗ずきらいの性格からである。

悟逸の幅 芋頭水指など鴻池家などの入札から得られし優品である

次客を初め一座は

お先公に対する想出話はつきず、貞子夫人からも（お祖父さんの折には私が餘り手助けシナカッタ為今となり皆さまにお満足を与えられません。只お祖父さんの手控をたどりてのお迷惑を）繰返す丈ですと述懐の内に香器を引かれお懐石を進められた。

向（赤貝キス）味噌合へ（器祥瑞四方平描割もよふ）　汁（嫁菜）　椀（コチ、椎茸若菜）　焼物（箱根御殿産若鱒）　強魚（鴨打蒲鉾）

器志野（四方）八寸（中津川産蟹カラス身、花）野菜、香の物（澤庵薄切小蕪）唐（ロ）片口、酒器（赤絵ノ徳利染附雲草）

杯和蘭陀

菓子（桜餅）器（一閑塩吹貝形）　いつもながら献立にも懐しきお料理を頂き中立

後席花入ハ（宗甫作一重切）銘深、更（この花入ハ私にハ初見にて大伐び）竹、よくも（斯くお集めありし物かと）花は（桜桃に桃花）梅母の三種

水指（溜塗曲）道志作（竹裏を用いし物）　茶入（瀬戸、銘三国又ノ名山桜）　箱裏ニ「やまたのみひとも寸涛めぬ桜花（伊■くな侘を我見せやせむ）」

外箱ハ霊水庵筆（令弟克徳氏）「昔より茶入ハ一ツ箱二ツ三国一の山桜花」と古人は一塊の茶入にも、こんなに娯みとしている　茶杓（澤庵共筒銘村雲）　茶碗御本三島写（丸紋黒蝶）建（ケン）水曲にてこの茶碗も又初めてのお使い、お婦人の初春へはふさわしき物であった

瀬戸茶入ハ外箱にも（ある通りご舎弟紅艶翁と共に愛用せられし緒りの）品丈偲出殊更深く感じた。続いてお淡に水指（同前）

茶入（蝶蒔絵中ハ刑部地）　茶碗（先代大樋馬上杯形）雛の絵　替（志野四方）　茶杓牙　建水（瀬戸寸胴）

お開広間に動座　床に銭、舜卿筆（杏花双鳥）彩色横物讃ニ「初看物揔関心萬不寿生、古自今昔日園林樽尚在可、隣枝上有朱禽」加州家伝来の名

幅が掛り他は何者をも飾らない所に閑寂の妙、現れてよく（番茶、水果物などお振舞の後）親美翁の発議にて（宗達下絵）金銀泥光、悦巻二巻の展示を乞はれ展観した事ハこの上なきお馳走であり眼満であった（潚々たる春雨ハ満庭を潤し霞む相模湾上漁舟点々として　銀鱗舟にみつかと思はる風光を賞し五時近くお暇帰京した

○琴平町飯後庵の夜会　三月六日

P 328

前日突然であるが一服上げたいとの事で、好きな道とて早速快諾　参入すると、相客ハ（朝鮮総督府記念館）主任である（加藤潅覚翁(3)、小磯國昭夫人(4)（藤井孝祐氏(5)に予））階上洋間待合ニ（横井也有翁筆（絵に■川■京の空也鉢たたきの画讃））ハ主人の岳父の筆とか）楽浪（出土の大壺ニ）花程々（床ニ利休像香炉）　雲鶴（外朝鮮器物の数々陳列）　懐石ハ階下六畳にて

向（海鼠芋アへ）　汁うど　椀（白魚椎茸若菜）　焼物（小鯛）　煮物筍外　湯椀土筆　八寸（生貝椎茸）聖豆

香物にて　主人相伴　若夫人の給仕にて、器物ハ朝鮮よりの将来物、（食事が終り）隣席茶室に動座

鈍翁筆（新宝云々）の歌一首　花入銅のツハ

花ハ椿　水指トコ鍋　茶入（瀬戸）　茶杓（如心）

茶碗ハ（作者不明の手造り）さて釜ハ（備前焼新釜ト）云ふ変り物にて（濃茶が振舞れお淡引続き）茶碗（朝鮮発掘替刷毛目）　茶入（秀次）等にて横井老一流の侘び茶で気軽に一夕の雅情を娯にされた

飯後庵は元王子製紙の参事現に朝鮮現地事業界に活躍、従って朝鮮器物を娯つつある

○自宅草庵の催　三月十一日　夜会

P 328

去る二日小田原での上巳の茶の折り（連座の方々から、益田夫人を一度お招しよと進られ、夫人も是非一度何いたいとの事であったが、お連客に対する私の催は所謂茶番式にてお出を願ふも憚り多く一度ハお断したが、皆さんから、それは承知の上、所替はれば何とやら、ナンデモとのお進で、臆面もなく、今宵お出を願った。）

お客組ハ（松永耳庵翁、畠山一斎翁　益田貞子夫人　畠山夫人　田中親美翁　平松老）の六氏）

懐石ハ向キス赤貝葱の味噌アエ　器ハ朝鮮唐津舟形片身替　汁嫁菜早蕨　椀鰤の糟汁小ネぎ

焼物甘鯛味噌漬　器備前紅鉢　煮物芋棒だら織部四鉢　湯吸物八寸ハ略し　香の物澤庵白菜　雲鶴鉢菓子自作

中立後席　床砥平石蹟墨　水指伊賀茶入南ばん芋の子　茶杓舟越伊豫共筒　茶碗堅手銘春霜不昧公箱

建水曲にて濃茶を呈した。道具組の不似合ひハ元より承知の上、有るがままとて連客の興味もそそらない事ハ覚悟の前である。広間に動座を乞い床に宗説筆雪中に梅ニ小禽の幅を懸け番茶水果子など呈した　宮島君ハ古墨跡研究家とて砥平石を用いた。然し常連とて天狗話に夜をふかされ十時半散会された

○熱海桃山夜雨荘　二月廿九日 正午

P 325

耳庵翁からの通知に、名古屋から横井横山の両老が上京中ゆへ一服催したいが家内ハ病中自分ハ多忙で一寸当惑している。貴所がお引受被下なら横井夜雨君を交へ道具会席ハ萬事貴意に任す　お引受出来れば、自分も客になりたいとの難題であったが二王、三王両老にも小田原以来とて引受けした。従って前晩から熱海に泊り掛けである。懐石など至極簡単甘味本意にて

広間床に冷泉筆為恭　白河法皇の像を掛ける。食事を初める頃耳庵翁も東京から馳付られて主客ハ五人

食事が終り席に光琳泥絵梅の画光悦賛　釜ハ芦屋繰口　水指瀬戸筒　茶入高取　茶杓原叟作骨川

茶碗古高麗普斎箱予の旧蔵にて茶を練る　香合ハ炭を略し　時代木地に上に角花形嵌入にて侘び物

引続き淡茶　水指同前　茶入石川丈山歌朱書一閑六角、茶碗権兵衛伊羅保写

替赤楽にて以上任せられても他人の道具

トンチンかんは当然であるが旅人の旅情を慰められる耳庵翁の友情に両老至極萬足、不手ぎはの罪も軽かりしよふにて、五時過一同熱海発帰京した。

○掃雲台上巳の茶（2）　三月二日 正午

P 325

先月廿二日為楽庵でのお催に、この二日に亦一会催すからお出をと予約されしが実現してお招きを得た。明日の雛の節句を日曜の今日にお繰上とも察られる。小田原駅に着くと同じ列車で畠山一斎翁お夫婦と落合い、熱海からは松永さんも来られ、迎いの車で掃雲台に、相南の地ハ三月ともなれば桃花も咲きそめている。先着の田中親美翁等玄関迄家人と共にお出迎いあり

待合洋間にハ松花堂筆唐画写柏の葉に塩吹貝五ツ　讃ニ「一身樽雀化紫殻白肌　膚口汲銀河月心會澹海殊□」箱ニ塩吹貝若荷葉

朝からの空模様ハ小雨となり廊子■伝いに（耳庵翁　畠山翁　田中翁　畠山夫人、予ハお詰め役　にて）為楽庵へ入席す

床に行成卿筆伊豫切　歌に「みちとせもなるとゆふももとせに　あはれ桜にあいにめにけり」三月三日の日附アリ朗詠切、台紙飛雲

この歌をよみてもご先代の三回忌の今年に当るのと、其の茶友を集めて上巳の茶を催しえてのお喜びと云ふ御主人のお心構へに何にか胸迫る物が湧き出てくる。香合織部水玉ノ絵

炭斗蒔絵サクヅ　箱火箸桑柄　羽箒白孔雀　鈬小豆かん　以上にてお炭手前がありこの間に歌に対す主客

『雲中庵茶会記』翻刻稿⑥

後藤　恒

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、第六冊冒頭の昭和十六年（一九四一）二月二十七日から、同冊途中の昭和十六年（一九四一）十月十四日までの記述の翻刻稿を掲載する。

前年の春頃より体調を崩していた兄・仰木魯堂を案じ、政斎は時折その病状に触れている。松永耳庵は名古屋から取り寄せた鱒を携えるなどして幾度となく魯堂を見舞い、元気づけられた魯堂は離床して自ら茶を点て振る舞った。その感動的な場面が、耳庵への謝意に溢れた文章によって丁寧に記述されている。

療養の甲斐なく九月二十日、魯堂はこの世を去った。

（ごとうひさし　福岡市美術館主任学芸主事）

凡例

- 翻刻にあたっては、仰木政斎著・味岡敏雄編の影印本『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）を底本とした。
- 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- 変体仮名は現用字体に改めた。
- 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。
- 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。
- 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに〔ママ〕を付すか、註記した。
- 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- 判読不能の文字は■で示し、判読困難な文字について推定したものは□で囲んだ。
- 前号までに註記した事項については、註記を省略した。

（影印本上巻の頁番号）

雲中庵茶会記　六

―――― P323

○自宅草庵の一会（1）　**昭和十六年二月廿七日夜**　―――― P324

冬の寒さもやはらぎ健康も多少良くなったを期会に釜を掛る気になり気軽な方々のお出を乞ふ

名物名器の茶に親まれし（人にも時にハこんな茶にも）娯あらんと（松永耳庵翁、宮島英君　田中親美翁　横井半三郎氏）を招く）

持ち合の道具　待合に（南蛮　雷鉢）を瓶掛に（銀薬かん　懸て）　汲出朝日焼、　振出祥瑞　出

し台朝鮮木地　時代　栗盆へ

とてなく

瓢手炉、莨盆（民芸　長角）　火入（染附　飛馬）などにて　三畳向切　小間に　引入れ

床（平林寺、蔵竹）尺八花入に（山椿に　豆カラ）を挿す　釜（古天明筋釜　光林院伝来）　例によりお炭は省略して

凡例

- 各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記にならった。
- 各論文中の著作物については『　』、団体名については＜　＞、作品名については《　》でくくった。
- 註の参考文献については概ね下記の順で標記した。
  日本語論文　執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ
  欧米論文　執筆者名“論文名”，編著者
- 著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ
- 註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと標記した。

福岡市美術館研究紀要
第 10 号

2022 年 3 月18日発行

編集・発行　福岡市美術館
〒810-0051
福岡市中央区大濠公園 1-6
PHONE：092-714-6051
印刷　株式会社四ヶ所
〒838-8512
朝倉市馬田 336

表紙写真

菱格子花星文様緯糸紋織腰衣、南スマトラ州 パレンバン、19-20 世紀

福岡市美術館蔵（エイコ・アドナン・クスマ・コレクション）

Skirt-cloth, *sarong*, Palembang, South Sumatra, 19th-20th

Eiko Adnan Kusuma collection, Fukuoka Art Museum

18-Hd-54